

福岡市西区

田 村 遺 跡

— I —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集

1982

福岡市教育委員会

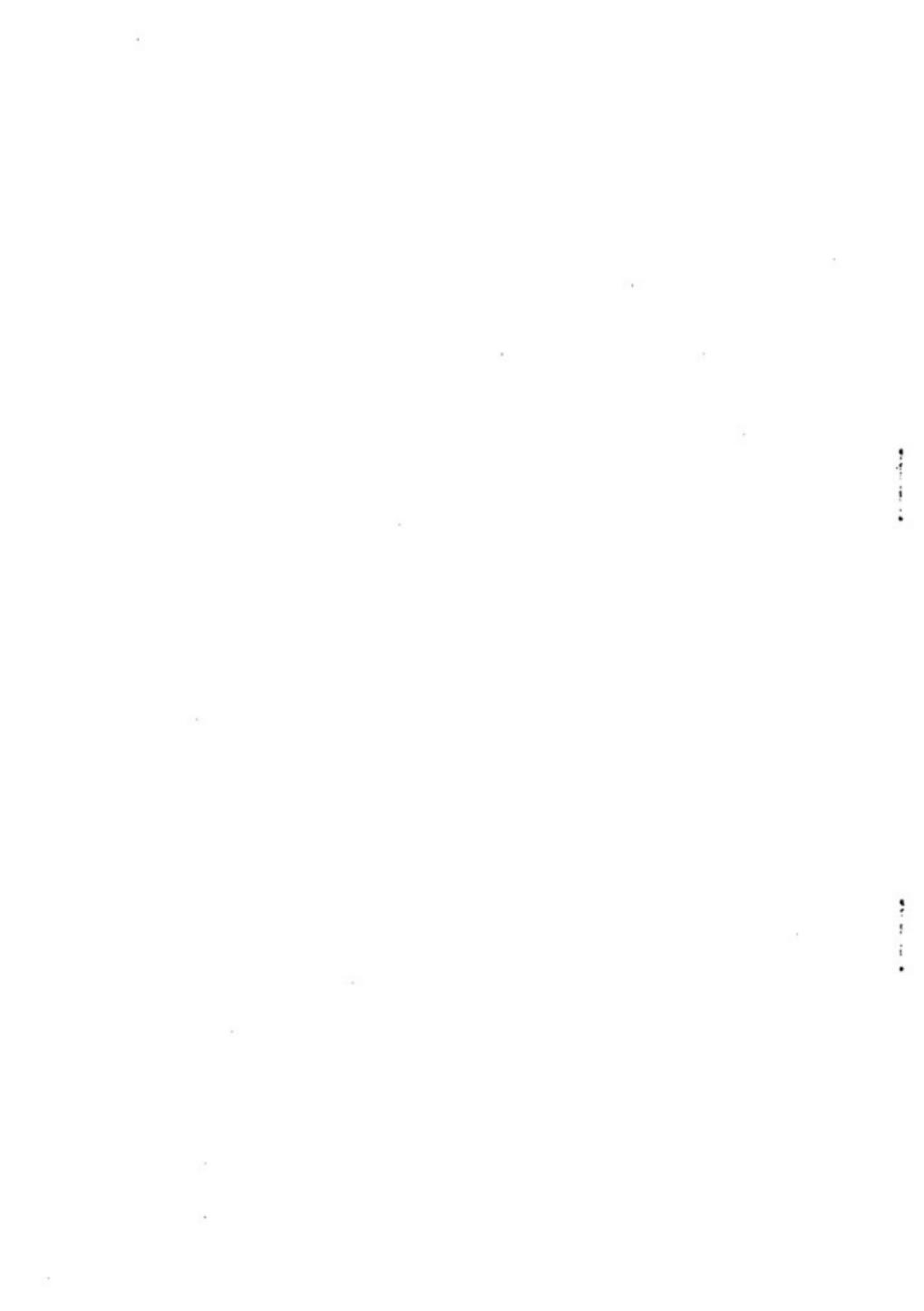
田 村 遺 跡

— I —

—福岡市西区田所在遺跡群の調査—

1982年3月

福岡市教育委員会



序 文

早良平野の中に位置する田村地区は近年急速に宅地化が進んでいるところです。

福岡市教育委員会は福岡市住宅供給公社の委託を受けて田村団地内の埋蔵文化財の発掘調査を昭和55年度から実施しています。

本書は昭和55年度から56年度にかけて調査した結果をまとめたものです。本書が文化財保護思想育成の一助として市民の皆さまに広く活用されることを願うとともに研究資料の一つとなれば幸いです。

調査から資料整理にいたるまで、地元関係者をはじめ多くの人々の協力のあったことを記し、深甚の敬意を表するものです。

昭和57年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

例　　言

1. 本書は福岡市住宅供給公社による田村町地建設に伴い、福岡市教育委員会文化課が昭和55年度から継続して発掘調査を行なっている田村遺跡の第1次調査報告である。
2. 本書で取り扱かったのは昭和55年度調査した第2地点の中世遺構についてのみで、他のものについては第2次調査報告で行なう。
3. 本書に掲載した図は山口謙治・浜石哲也・渡辺和子・岩切幹喜・大橋隆司が実測し、浜石・大橋・赤司善彦・岡部裕俊が製図を行なった。
4. 本書で使用した写真は浜石が撮影したが、一部二宮忠司氏による。
5. 本書に使用する方位はすべて磁針で、真北との偏値は西偏6°40'である。
6. 本書の執筆・編集は浜石が行なった。

本 文 目 次

序

Iはじめに	1
1 調査にいたる経過	1
2 調査の組織	1
II 遺跡の立地と周辺の遺跡	3
III 調査の記録	5
1 調査の概要と経過	5
2 第1地点の調査	7
3 第2地点の調査	9
(1) 墓	11
(2) 掘立柱建物	12
(3) 穴穴住居跡	19
(4) 土 壤 墓	21
(5) 上 墓	24
(6) 溝	29
(7) その他の遺構	31
IV 小 結	32

図 版 目 次

本文对照頁

図版 1	田村遺跡周辺航空写真(昭和55年11月撮影).....	3
図版 2	田村第1地点全景 1 南より 2 東より.....	7
図版 3	第1地点 1 溝・土壤 2 SX 1 梁列.....	7
図版 4	田村第2地点全景.....	9
図版 5	第2地点東区遠景 1 東より 2 東南より.....	9
図版 6	第2地点東区近景 1 西より 2 東より.....	9
図版 7	第2地点西区遠景 1 東南より 2 南より.....	9
図版 8	1 第2地点西区近景.....	9
	2 SX 1 ~ 3 横.....	11
図版 9	第2地点西区遺構出土状況(北より).....	12
図版10	第2地点西区遺構出土状況(南より).....	12
図版11	第2地点南区近景 1 北より 2 南より.....	12
図版12	1 SC 02・03竪穴住居跡.....	19
	2 SC 05竪穴住居跡.....	21
図版13	SC 04竪穴住居跡 1 東より 2 西より.....	19
図版14	SC 01竪穴住居跡, SK 22・23土壤墓 1 東より 2 北より.....	19
図版15	1 SK 24土壤墓土器出土状況.....	21
	2 SK 25土壤墓.....	21
図版16	1 SK 49土壤墓.....	23
	2 SK 35上塙.....	28
図版17	1 SD 09溝と SK 07土壤.....	24
	2 SK 07上塙.....	24
図版18	1 SD 09溝土層断面.....	29
	2 SD 09・SD 10溝土層断面.....	29
図版19	1 SD 09溝と SX 04遺構.....	31
	2 SX 13柱穴列.....	32
図版20	1 SX 12集石遺構付近.....	32
	2 SX 12集石遺構.....	32

挿 図 目 次

	本文頁
第1図 周辺の遺跡.....	2
第2図 田村遺跡全体図.....	4
第3図 調査風景.....	5
第4図 第1地点全体図.....	6
第5図 第1地点東壁上層実測図.....	7
第6図 第2地点全体図.....	8
第7図 第2地点西壁土層実測図.....	折り込み
第8図 弥生時代河川写真.....	10
第9図 掘立柱建物実測図 (1).....	12
第10図 掘立柱建物実測図 (2).....	13
第11図 掘立柱建物実測図 (3).....	14
第12図 掘立柱建物実測図 (4).....	15
第13図 掘立柱建物実測図 (5).....	17
第14図 竪穴住居跡実測図.....	20
第15図 土壙墓尖測図 (1).....	22
第16図 土壙墓実測図 (2).....	23
第17図 土壙実測図 (1).....	25
第18図 土壙尖測図 (2).....	26
第19図 溝配置図.....	30
第20図 S X12・S X13実測図.....	31



I はじめに

1 調査にいたる経過

1979（昭和54）年、福岡市西区大字田に市営住宅を建設する計画があがり、福岡市建築局より文化課に対して当該地の埋蔵文化財有無について事前の確認がなされた。申請地は1975（昭和50）年から継続して発掘調査の行なわれている四箇遺跡の北約1.5kmの所に位置し、前年になされた遺跡の分布調査ではほぼ全域にわたって遺物の散布がみられた所である。1979年発行した「福岡市文化財分布地図（西部Ⅰ）」では申請地一帯は田村遺跡群として登録され、遺跡の所在は疑うべくもなかった。

文化課では建築局福岡市住宅供給公社と協議の結果、とりあえず第1年度建築分15000m²について試掘を行ない、遺跡の性格とその範囲を確認することにした。試掘調査は9月10日から17日にかけて行ない、その結果約3800m²の部分に住居跡・溝・土壤墓など古代の遺構を検出した。そしてこの部分に対しては発掘調査を必要とし、残りの部分に関しては建築に同意する旨を申請者に伝えた。建築局では一部設計を変更し残り部分から工事にとりかかった。発掘調査は翌年12月5日から4ヶ月の予定で開始した。

2 調査の組織

調査委託 福岡市住宅供給公社

調査主体 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第1係

事務担当 岡島洋一

発掘担当 山口謙治・浜石哲也

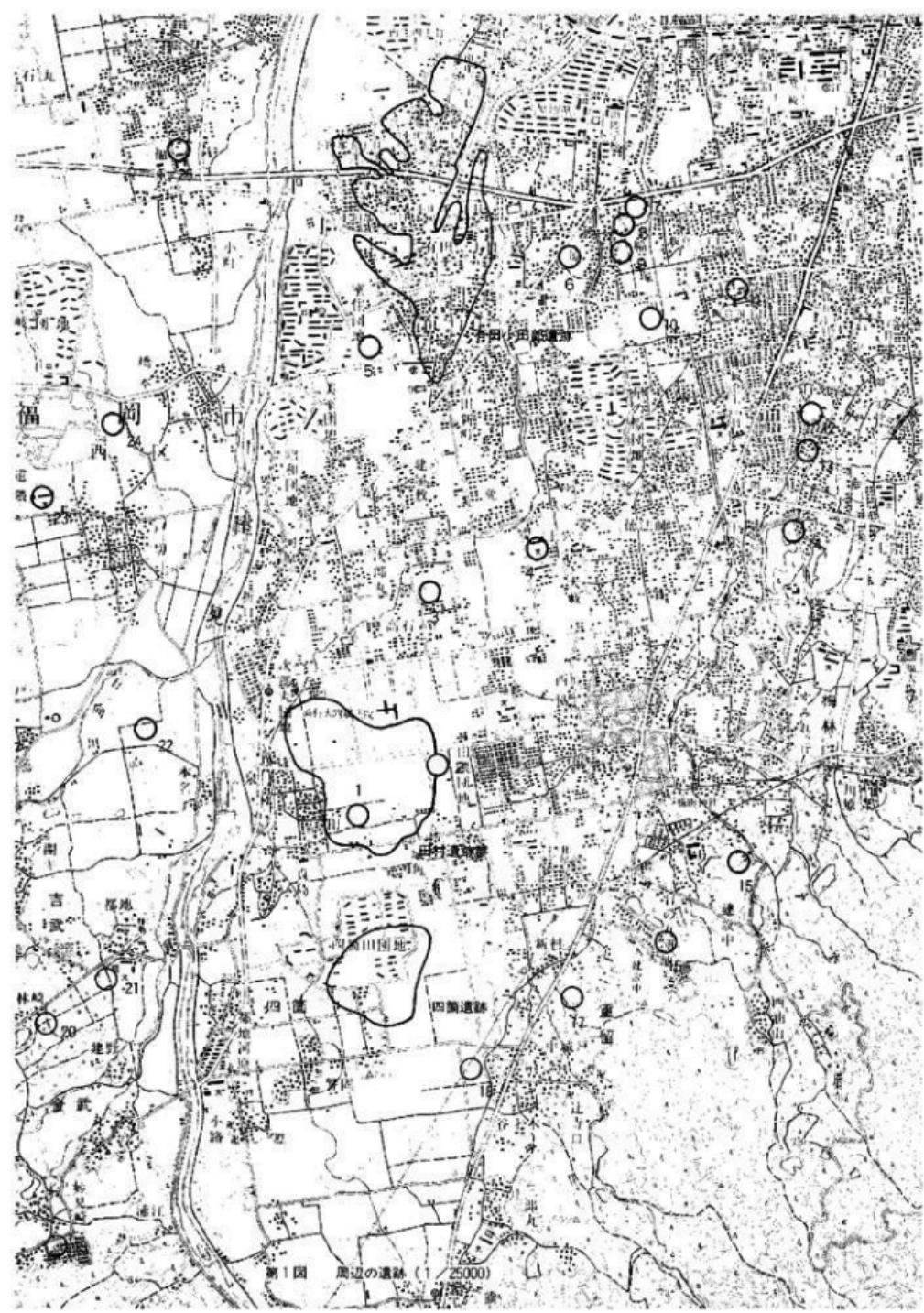
発掘補助 渡辺和子・小林義彦・杉山富雄

整理補助 岩切幹嘉・大橋隆司・赤司善彦・岡部裕俊（同志社大学）

発掘・整理作業にあたっては以下の人々の協力を得た。

柳光雄・尾崎達也・又野栄子・下郡フミ子・藤崎テル子・神ツイ・菰田洋子・萬田オリエ・松隈ユキノ・谷ヒサヨ・典略初子・尾崎八重・菊地キミ・菊地栄子・池ヤエ・真名子千恵子・菊地ミツヨ・大橋隆司・尾崎順子・吉岡タヤ子・奥田洋美・高木順子・手島香代子・岩崎耕一・豊島春規・三代英機・金子ヨシ子・吉岡蓮枝・伊藤武志・岩切幹嘉・高倉隆・青柳恵子・神月満千枝・林紀子・井手口孝子・國代袖香

発掘調査においては二宮忠司氏（文化課）の莫大なる援助を得た。また島倉巳三郎先生には木材の鑑定で、西谷正九州大学助教授、下條信行平安博物館助教授には発掘調査で御指導、御助言を得た。記して感謝したい。



第1図 周辺の遺跡 (1:25000)

II 遺跡の立地と周辺の遺跡

川村遺跡は福岡市西区（改区後は早良区）大字田に所在する。遺跡は室見川を中心とした河川の沖積作用によって形成された早良平野のはば中央部に立地し、標高15~17mを測る。住宅建設前はすべて水田として利用されていた。

遺跡は分布調査によって田村遺跡群と命名された一部にあたり、この遺跡群すでに調査されたものとして高柳遺跡がある。この遺跡は今回調査した第1・2地点の東約400mにあり、溝状遺構や4世紀後半の窓穴、10世紀の窓穴などが検出されている。遺跡立地、遺構のあり方など、田村遺跡と相通じるものである。

この田村遺跡群にみられるような早良平野での沖積地の発掘調査例は近年増加する傾向にある。これまで室見川の東で調査されたものとして、田村遺跡群の南では四箇遺跡、北では次郎丸高石遺跡、鶴町遺跡、原深町遺跡、原談儀遺跡、原六丁目遺跡などがあげられる。これらはいずれも低湿地内の微高地をその中心立地とし、その周辺の低湿地に生産地（水田）を括げていったものと考えられる。明確な水田址の確認はなされていないが、多くの遺跡が溝とそれに伴う堀などの施設をもち、また農耕具の出土から水稻農耕が行なわれたのは疑いのない所である。その開始時期は出土遺物から弥生時代前期初頭にのぼると考えられ、さらに古墳時代前期にひとつの発展期があることが知られる。以後、古代・中世から現代に至るまで、微高地に生活の場をもち、周辺に水田をもうけていく形態が続いたものと思われる。そのため、微高地面での遺構は多くが多時期にわたって複合し、また後世の削除を受けたものが多く、その検出を困難なものとしている。今報告の田村遺跡もその例にもれない。

註(1) 福岡市教育委員会「福岡市文化財分布地図(西部1)」 1979

(2) 横山邦龍・力武卓治「高柳遺跡」福岡市埋蔵文化財報告書第20集 1981

(3) 佛田純孝(編)「四箇周辺遺跡調査報告書(1)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集 1979

柳田純孝(編)「四箇周辺遺跡調査報告書(2)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集 1978

二宮忠司(編)「四箇周辺遺跡調査報告書(4)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集 1981

(4) 松村道博「次郎丸高石遺跡」福岡市学校建設地内調査報告書「福岡市埋蔵文化財調査報告書第69集」 1981

(5) 力武卓治「鶴町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集 1976

(6) 飛高憲雄・力武卓治「原深町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第71集 1981

(7) 1975年 先期調査

(8) 1981年福岡市教育委員会調査。

1 田村遺跡(第1・2地点)	9 原前田遺跡	17 重留遺跡
2 高柳遺跡	10 飯倉向江遺跡	18 有田七田前遺跡
3 次郎丸高石遺跡	11 原深町遺跡	19 金武古墳群
4 鶴町遺跡	12 飯倉原遺跡	20 半多田遺跡
5 福重遺跡	13 干隈遺跡・干隈古墳	21 郡地南遺跡
6 原談儀遺跡	14 干隈クマゾエ古墳群	22 飯盛遺跡
7 原小園遺跡	15 影塚1・2号古墳	23 戸切遺跡
8 原6丁目遺跡	16 山崎古墳群	24 橋本櫻田遺跡

第2図 田村遺跡全体図 (1/3000)



III 調査の記録

1 調査の概要と経過

田村遺跡の第1次（1980年度）調査は、12月5日から開始した。対象地は試掘調査で設定された住宅建築予定地内の一帯西側のブロックの2地点で、その面積は3800m²である。この2地点の間には調査時すでに五階建の住宅が3棟立っていた。調査にあたっては南側の発掘場所を第1地点、北側を第2地点とし第1地点のユンボによる盛土および表土剥ぎから発掘調査を開始した。

第1地点は盛土の搬出に手間取り、ユンボと人力による遺構検出が並行して行なわれることとなった。12月末までに遺構検出が終り、翌年1月上旬実測を終了した。発掘調査面積約450m²。ほぼ東西に走るものを中心とした大小溝8、土壤6を検出した。北側は段落ちし、それに並行する杭列があり、調査対象地外へと続いている。

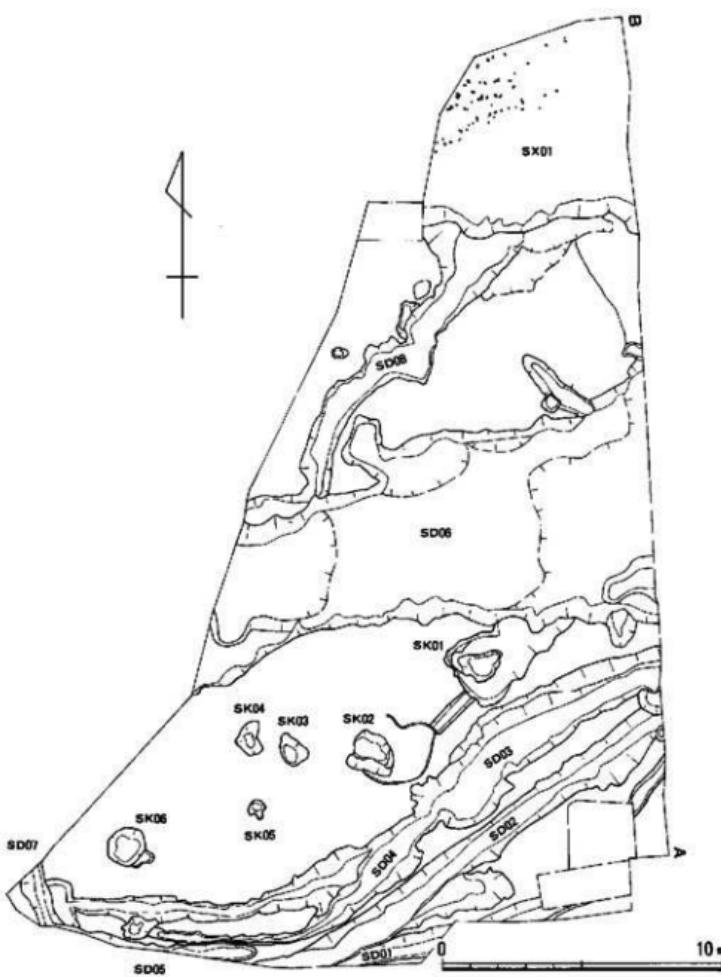
第2地点は北東—西南に斜辺をもつ三角形を呈しており、面積は約2200m²であった。12月末から表土剥ぎを行なった結果、西側は柱穴・土壤などが集中するのに対し、東側は中央を東西に走る大溝とそれに付随する小溝が主となっていることが判明したため、まず東側部分から遺構の検出を始めた。そして順次西側へと調査を進めた。2月中にはほぼこの部分の調査をおえ、溝の他、櫛立柱建物・堅穴住居・土壤墓・柵などを確認した。この調査の過程で南側が

さらに段落ちしていることが判明し、3月よりこの部分の調査に全力をそそいだ。その結果、弥生時代中期の川とそれに付設された柵状遺構などとともに多くの木器・木材の出土をみた。3月中旬にはほぼ遺構の検出を終り、4月にかけて実測・遺物の取りあげを行い、14日をもって第1次の調査を完了した。

4月22日からは、第1次調査の東側ブロックで第2次調査を開始し、現在まで発掘を継続している。調査範囲が狭かった第1地点も、この第2次調査で補うことができ、また第2地点とは別に形成された集落址も検出している。次年度以降報告の予定である。



第3図 調査風景(第2地点)



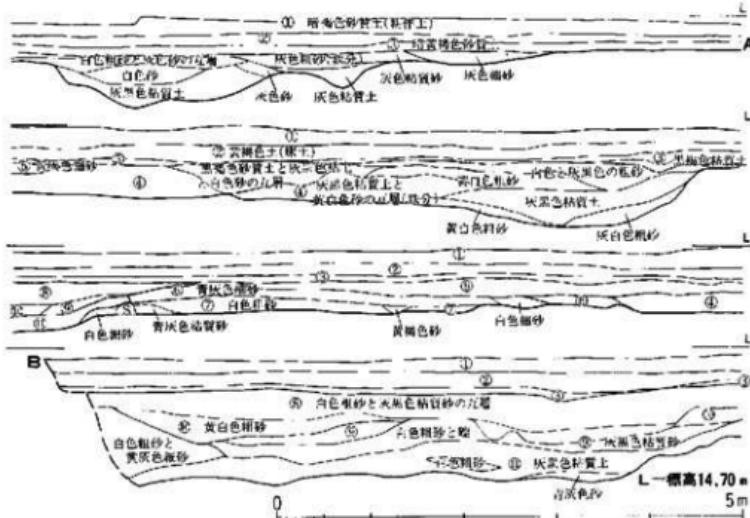
第4図 第1地点全体図(1/200)

2 第1地点の調査(第4・5図、図版2・3)

第1地点は試掘調査の際、古代の住居跡・溝などの遺構をのせる台地が検出され本調査を必要とするとされた所である。表土(耕作土・底土)を排除した下には、厚さ約10cmの粗砂混りの暗黄褐色土があり、その下に黄褐色の粘土面が抜がっていた。ただこの面は均一的なものではなく、場所によっては礫、あるいは青灰色のシルトになっている。この面に溝・土壤などが掘り込まれているが、いずれも浅く、本来的にはもっと高く、後世の削平を受けたものと考えられる。また発掘区の北側は黄褐色粘土面が、段落ちに向う途中でシルトさらには礫へと変わってゆく。黄褐色粘土面以下に遺構・遺物はみられなかった。

検出した遺構は黄褐色粘土面で溝・土壤・北側段落ち(第2次調査で小河川と判明)とそれに伴う杭列である。溝は発掘区南側で、SD01・02・03・04が切り合いながら西からやや東北に方向を変えながら走る。SD07は南北に走る。ともに溝幅1m前後、深さ0.5m前後の規模のものである。SD06は発掘区中央を東西に走り、幅は5~7mを計るが、深さは0.3m位で浅い。SD08がこれより段落ちへと続く。土壤はいずれも不整形で浅いものである。段落ち部分に杭列(SX01)が約4列築かれ、調査区外にさらに延びる。

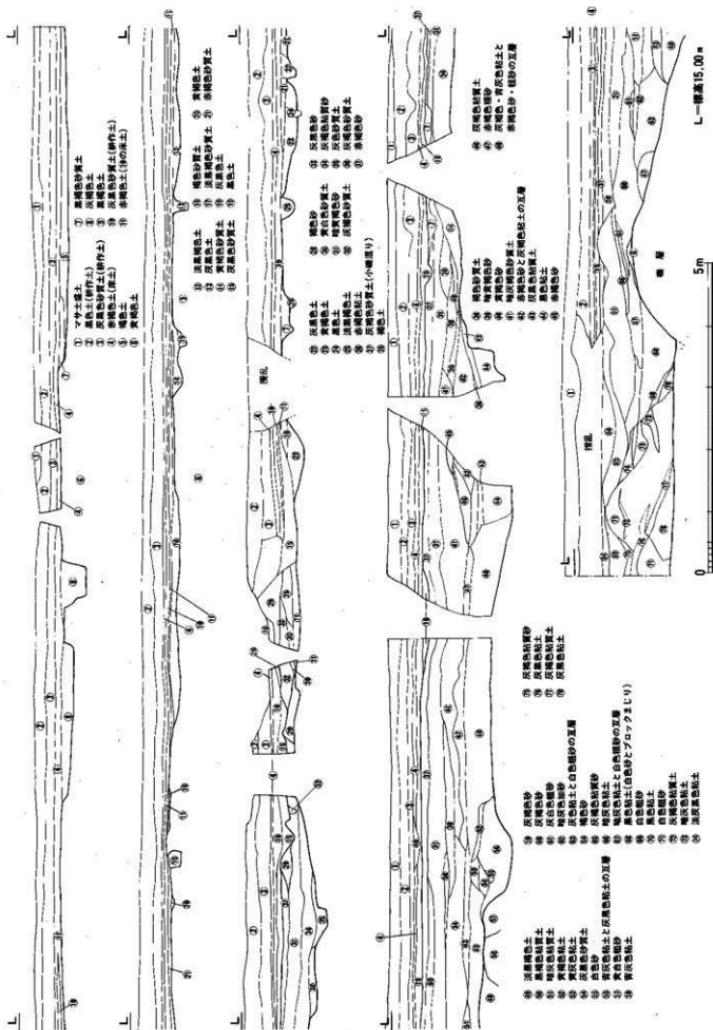
この第1地点の詳細については、第2次調査結果と併せ、次年度報告する。



第5図 第1地点東壁土層実測図(1/60)



第6図 第2地点全体図(1/500)



第7圖 第2地點測量土層實測圖 (1 / 60)

3 第2地点の調査

第2地点は第1地点の西北に位置する。試掘調査では、この両地点間は遺構が全く認められず、旧河川があったと考えられた。すなわち第2地点は第1地点の対岸と想定されていた沢である。第2地点ではやはり黄褐色土面が拡がり、その上に古代の住居跡・溝・掘立柱建物・土塙墓などの遺構が確認されている。

発掘調査の結果、厚さ30~40cmの表土層(耕作土・床土)のすぐ直下に黄褐色土が現われた。場所によっては表土層と黄褐色土の間に厚さ10cmたらずの砂混り褐色土がみられ、遺構がこの上面より掘り込まれている状況が確認された。黄褐色土から掘り込まれる遺構がいずれも浅いことから、上記の褐色土も含め遺構面はかなりの削平を受けたものと考えられる。調査にあたってはこの黄褐色土を遺構の地山と認定して、面的な拡張を行なった。ところが、三角形状を呈する発掘区内の東北~西南の斜辺に平行して、この黄褐色土がみられなくなり、かわりに赤褐色砂土に遺構がのる様相を呈した。特にこれは南~西南側に顯著にみられた。この変換線は極めて明瞭であり、赤褐色砂部分は旧河川にあたり、その埋没後遺構が作られたものと予想した。

そこで発掘調査にあたっては、表土層直下の黄褐色土とそれにレベル的に連続する赤褐色砂を同一面として把握し、この面を調査した後、赤褐色砂部分をさらに掘り下げることにした。この黄褐色土・赤褐色砂面は面積が広いため、東・西・南の3区に分け、順次調査を行なった。東区は発堀区西端から20m以東の部分で、主としてSD09とそれに付随する小溝、土塙などを検出した。およそ水田とそれに伴う水利施設と考えられる。西区は東区の西にあたり、南区との境はSD23に求められる。この部分は東区と様相を異にし、槽・掘立柱建物・竪穴住居などの集落址を示している。また土塙墓もみられ、時期を追えて墓地が形成されていたことを表わしている。多数の柱穴は掘立柱建物が建て替えも含めてかなり建てられていてそれを窺わせるが、建物として平面規模を確認したのはこの地区で7棟にすぎなかった。南区の遺構は前述したように赤褐色砂面上に営なされており、その検出は黄褐色土部分に比べ困難であった。遺構は西区とはほぼ同様で掘立柱建物・土塙などを検出した。遺構はさらに東および南に拡張しているが、発掘区外にあたり、調査には至らなかった。

以上の調査を経た後、赤褐色砂以下を掘り下げた。その結果、この部分は東北に走る河川で、弥生時代中期の遺構が付設していることが判明した。この河川の幅は発掘区外にかかりわからないが、西壁にトレンチをあけて調査した限りでは40m以上あると考えられる。ただ単一時期の河川かどうかは、調査を行ないえたのが台地(黄褐色土)部分に近い場所だけだったため判然としない。この河川には西端で北から溝が1条流れ込み、それと直交して南北に各々横状遺構

が設けられている。また河川を横切るようにして台地上から杭の間に石を積んだ堰状の遺構がある。この河川に伴う時期の生活・生産面はやはり黄褐色土の台地上に求められる。黄褐色土と赤褐色砂の交換線上で途切れる溝などが、その片鱗を残しているといえよう。

この旧河川を掘ると平行して、台地面(黄褐色土)の掘り下げもトレンチ方式で行なつた。というのは、この台地上から主体となる中世の遺構・遺物の他に縄文時代後期～晩期の土器・石器が出土したからである。トレンチ内の土層は黄褐色土一褐色微砂質土一茶褐色粘質土と統き深さ70cm前後で砂礫層に達した。この結果、縄文時代後期の土器(埋甕もある)・石器の多くが黄褐色土から出土し、鉾型石核・鋸齒鎌などは褐色微砂質土上から出土することが判明した。

以上述べてきたことを、時代を追って要約すればおおよそ以下のようになる。この第2地点は遙くとも縄文時代後期には台地上において生活が営まれている。その段階では台地上の黄褐色土は完全に堆積していない。弥生時代中期には台地の南側に走る河川を積極的に利用する。横状遺構によって集水を行ない台地上で農業を行なったと考えられる。古墳時代の遺物も散見するが、明確な遺構は伴わない。河川は次第に埋没し、古代～中世に至って発掘区の西側(河川埋没面を含める)では集落・墓地が形成される。東側は農業に関連すると考えられる水利施設がある。集落・墓地は切り合ひ、形成時期に差があると考えられる。大まかには、さらに西側に拡がる集落と、東側に延びる生産地(水田)に分割できる。

以下本書では上記したうち、黄褐色土(台地)一赤褐色砂(旧河川上)の面で捉えた古代～中世の遺構のみについて報告する。その遺物およびそれ以前の遺構・遺物については次年度の報告書で詳述する。



第8図　弥生時代河川(西南より)

(1) 棚 (付図・図版8)

発掘区の西区と東区の境では南北に23mにわたって続く。北側は発掘区外へと延びる。柱間は幅60cm(2尺)のかなり幅狭いもので、南北両部分に分れる。北側部分では柱穴は14個確認でき、3mの間隔をとってやや西にふれて直行する16個の柱穴からなる南側棚へと続く。この南側棚はSD26に接するようにして途切れる。両棚間の中央1.50m(5尺)の所には、径30cm、深さ15cmの柱穴があり、棚を構成する柱穴が幅40~60cmの不整形で深さも10cm弱しか残存していない状況と比べ異なる。あるいはこの部分が、棚からの出入口を構成していたのかもしれない。柱穴からは、土師器・須恵器・龍泉窯系青磁器などの細片が出上した。

SA02 SA01の北側棚の西側にある。ほぼ南南西に走る8個の柱穴からなる。柱間はほぼ60cm(2尺)で、柱穴自体は不整形をなし幅40~50cm、深さ10cmたらずのものである。南端はSD20に接する所で終わるが、北側はさらに続くものと考えられる。柱穴からの出土遺物はない。位置関係からいってSA03と対応するものであろう。

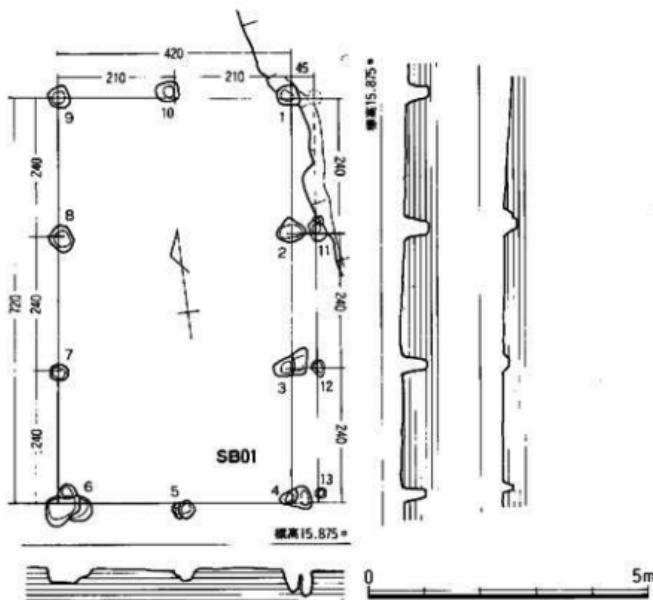
SA03 SA02から南に約11m離れる。南南西に走る12個の柱穴より構成される。南端はSD21に接する。柱穴は不整形で幅40~60cm、深さ10cmたらずである。柱間はほぼ60cm(2尺)を計る。柱穴からは土師器・須恵器細片とともに玉縁の白磁片が出土した。

SA04 SA01の東側に南北方向で築かれた棚である。北端は発掘区外にかかり、そこより南に13.5m延びる。柱穴は径15~25cm、深さ20~30cmの円形を呈する。柱穴間は北端から5間分が120cm(4尺)とほぼ等間隔であるが、それより南は240cm(8尺)、300cm(10尺)、240cm(8尺)と幅広くなる。あるいは別の遺構をなすものかもしれないが、SA01とほぼ平行で直線的に設けられている所から、ここではSA04としてまとめた。柱穴埋土からは土師器の細片が15点ほど出土した。

SA05 発掘区の西区西端部近くで検出した南北方向の棚である。2間分を確認した。柱穴は径20~30cm、深さ20~30cmの円形で、柱穴間は各々270cm(9尺)を計る。掘立柱建物の一部かとも考えられるが、対応する柱穴がなくまた検出した掘立柱建物には柱間寸法が9尺を計るものがない所から、一応棚として取り扱った。柱穴埋土からは土師器細片と鉄滓が出土。

SA06 西区の南側で検出した南北方向の棚である。SA04の西に平行して3間分を確認した。柱穴は径15~20cm、深さ15~25cmの円形で、柱間は180cm(6尺)の等間隔である。南側でSD29を切っている。これに対応する柱穴は見られず、位置関係からいってSB04の目隠し塀である可能性が強い。柱穴埋土からの出土遺物はない。

SA07 西区の東南に位置する東西方向の棚である。径20~30cm、深さ15~30cmの柱穴が4個で3間分をなす。柱間はほぼ180cm(6尺)の等間隔である。SB08の北側柱に平行する棚で、目隠し塀とも考えられる。SD21を切るが、SD22との関係は不明である。柱穴埋土からの出



第9図 挖立柱建物実測図(1) (1/100)

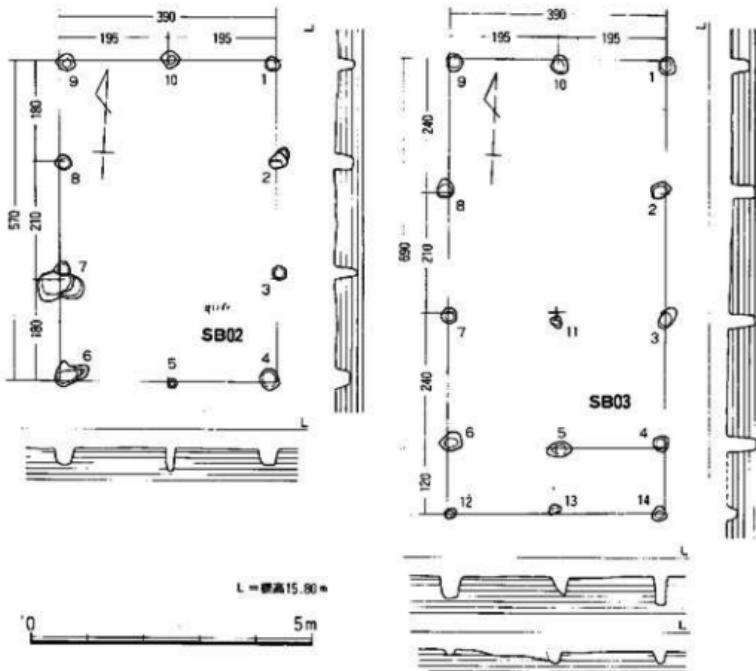
土遺物はない。

S A08 S A04のさらに東側で検出した南北方向の棟である。2間分を確認したが、北は発掘区外にさらに延びるものと考えられる。柱穴は円形を呈し、径20~30cm、深さ22~30cmを計る。柱間は210cm(7尺)で等間隔である。出土遺物はない。

(2) 挖立柱建物 (第9~13図、図版9~11)

発掘区の西および南区から15棟分の掘立柱建物を検出した。特に西区に集中し、南側で5棟の重複がみられる他、2棟、3棟の重複が認められる。しかし、まだ多数のピットが残っており、これをすべて掘立柱穴とするには問題があるにしろ、まとめきれなかった掘立柱建物があることは残念ながら認めざるをえない。

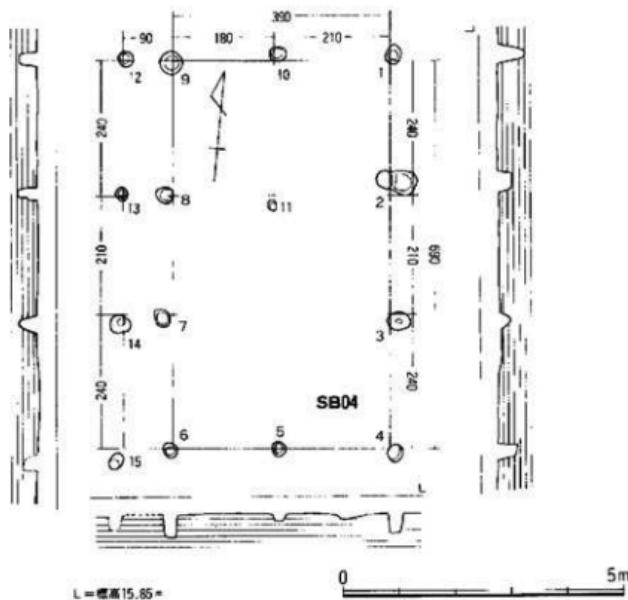
検出した掘立柱建物は身舎が 2×3 間の南北棟6、東西棟2、 2×4 間の東西棟1、 1×2 間の南北棟1、 2×2 間の総柱棟2、 1×1 間棟2である。平面規模的には 2×3 間の建物が主体を占める。



第10図 摂立柱建物実測図(2) (1/100)

S B01 (第9図) 西区の中央で検出した南北棟の西廻付建物で、南半分は S B02と重複する。身舎は 2×3 間で、実長は梁行420cm、桁行720cmを計る。柱間寸法は梁が7尺、桁が8尺の等間隔である。廻柱は東側柱から45cm(3尺)離れて設けられるが、北側の1間分は検出できなかった。その南2間分の柱間寸法は8・8尺である。この柱間には各々ピットがあり、あるいは柱間寸法がまちまちな日隠し隙となる可能性もある。柱穴は身舎で15~60cm、深さ30~40cmの不整円形、崩で径15~30cm、深さ10cm前後の円形をなす。柱穴6はS B02の柱穴7を切っている。また柱穴1はS D20を切る。柱穴埋土からは土師器・青磁・白磁などの破片とともに鐵滓が出土している。

S B02 (第10図) S B01の南側に重複して検出した側柱だけの建物である。 2×3 間の南北棟で、実長は梁行390cm、桁行570cmを計る。柱間寸法は梁が13尺の二等分(6.5尺)、桁では

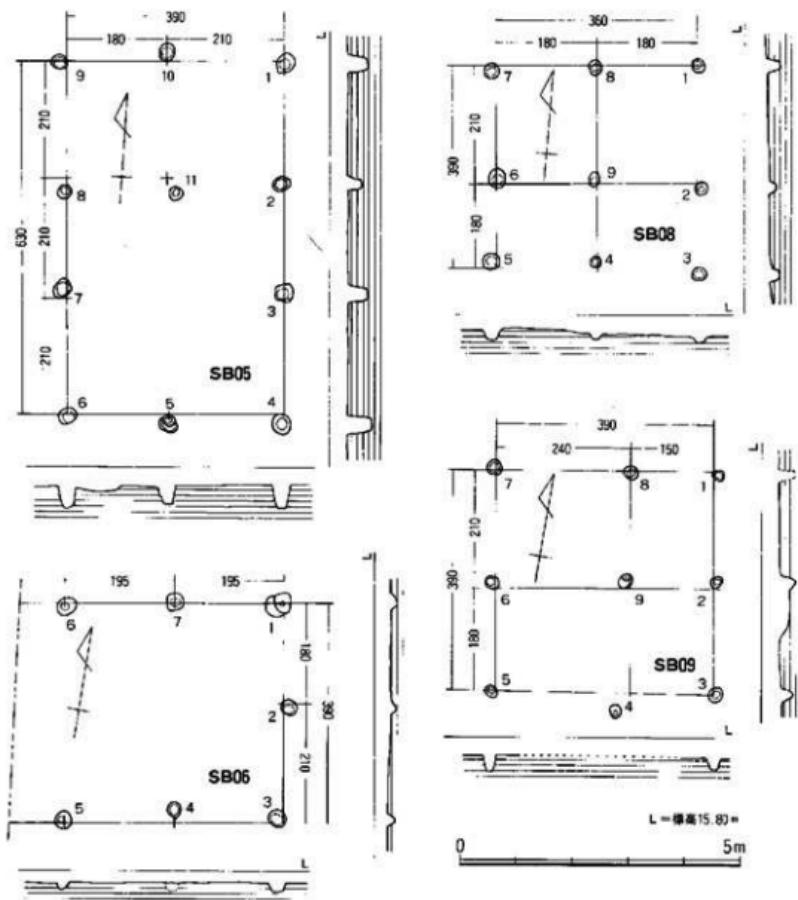


第11図 掘建柱建物実測図(3) (1/100)

中央間が広く7尺、両脇間は6尺である。柱穴は径25~50cm、深さ30~40cmの円形をなす。柱穴埋土からは土師器の細片とともに灰陶陶器、鐵滓が出土した。

S B03 (第10図) S B02西2mの所で検出した南北棟3×4間の南廂付建物である。身舎は実長梁行390cm、桁行690cmで、柱間寸法は梁が13尺の二等分(6.5尺)、桁では中央間が狭く7尺、両脇間は8尺である。南の梁間柱の北1間に床束とみられる径20cm、深さ20cmの円形柱穴がある。廂は桁間寸法4尺、梁間寸法は身舎と同じである。身舎の柱穴は径30~50cmの円形で、深さ40~60cmであるのに対し、廂の柱穴は径20cm、深さ15~20cmと小さく浅い。S D20・21・22・26を切る。S A01とも重複するが切り合はない、先後関係は不明。柱穴埋土からは、土師器・青磁器の破片が出土した。

S B04 (第11図) 西区南側で検出した南北棟3×3間の西廂付建物で、S B05、S B08と重複する。身舎は2×3間で実長梁行390cm、桁行690cmを計る。柱間寸法は梁が東から7・6尺と不等、桁は中央間が狭く7尺、両脇間は8尺となる。北の梁間柱の南1間に床束とみられる径20cm、深さ21cmの円形柱穴がある。廂は梁行が90cm(3尺)で、桁は身舎とはほぼ同じ寸法



第12図 標立柱建物実測図(4) (1/100)

をもつ。身舎の柱穴は径28~45cmの不整円形で、深さはほとんどが24~50cmを計るが、南の妻柱に相当する柱穴5は深さ12cmと浅い。廬柱は径25~39cm、深さ26~36cmの円形をなす。大半の柱穴の埋土から遺物が出土しており、いずれも細片であるが土師器・須恵器・白磁・龍泉窯

系青磁などの陶磁器類とともに鉄滓がみられる。S B08に柱穴2が切られており、先後関係を確認することができたが、S B05との関係は切り合う柱穴がなく不明である。なお、西廻にそって南北方向に続くS A06は、この建物の目隠し塀と考えられる。

S B05（第12図） 西区南側で検出した側柱と床東柱をもつ建物である。2×3間の南北棟で、梁行390cm、桁行630cmを計る。柱間寸法は梁が東から7・6尺の不等間隔、桁は7尺の等間隔である。床東柱は北梁間柱の南1間にあり、径26cm、深さ19cmの円形をなす。側柱穴はほぼ円形に近く、径30~37cm、深さ30~40cmのものが多い。柱穴9を除いた柱穴埋土中より、上師器・須恵器・白磁の細片が出土した。S B04、S B07、S A06と重複するが、柱穴の切り合いかなく、先後関係は不明である。

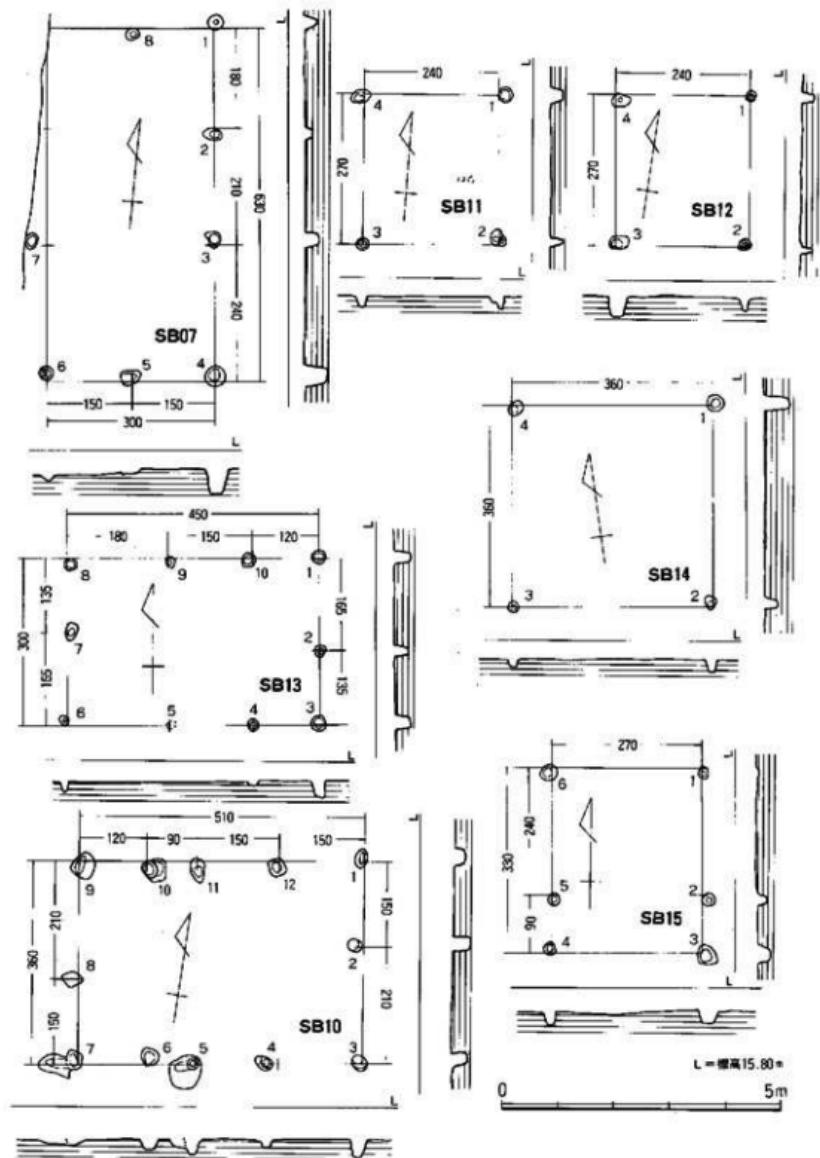
S B06（第12図） 南区の西端で検出した側柱だけの建物である。西側に妻柱がないことから建物は発掘区のさらに西に延びると考えられる。おそらく2×3間の東西棟をなすもので、梁行390cm、桁行2間分は390cmを計る。柱間寸法は梁が北から6・7尺と不等、桁行2間は13尺を2等分（6.5尺）したものである。柱穴は径30cm前後の円形で、深さは9~15cmである。柱穴埋土からは上師器の細片が出土している。

S B07（第13図） 西区の西南端で検出した側柱だけの建物である。西北隅は発掘区外にかかり、東側でS A06、S B05と重複する。2×3間の南北棟で、実長は梁行300cm、桁行630cmを計る。柱間寸法は梁が5尺の等間、桁が北から6・7・8尺の不等間隔をもつ。柱穴は径24~38cm、深さ23~40cmの円形を呈し、両妻柱は8、16cmと浅い。柱穴埋土からは土師器の細片が出土した。S A01、S B05との先後関係は柱穴の切り合いかなく不明。

S B08（第12図） 西区の南側で検出した総柱の建物である。梁・桁とも2間の正方形で、実長はともに360cmである。柱間寸法は梁が6尺の等間であるに対し、桁は北から7・5尺の不等間隔をなす。柱穴は円形で径20~33cm、深さ20~40cmを計る。S B04・S B09と重複し、S B04を柱穴6が切っているが、S B09とは柱穴の切り合いかなく先後関係はわからない。柱穴埋土より土師器と白磁の細片が出土した。なお北側柱にそって東西方向に走る櫛S A07はこの建物に付随した廻の可能性がある。

S B09（第12図） S B08とほぼ重複するような位置で検出した。S B08よりわずかに西側にあたり、また建物の方向が西にかたむく。2×2間の総柱の建物で、実長は梁・桁行とも390cmで方形をなす。柱間寸法は梁が東から5・8尺、桁が北から7・6尺のともに不等間隔である。柱穴は径24~28cmの円形を呈し、深さはほぼ30cm前後を計る。柱穴埋土からは上師器の細片が出土した。この建物は柱間寸法は異なるものの、S B08と同じ規模をもち、先後関係はつかめないが建替えがなされたものと考えられる。

S B10（第13図） 南区北端で検出した側柱だけの建物である。2×4間の東西棟で、実長は梁行360cm、桁行510cmを計る。柱間寸法は東側梁が北から5・7尺、西側梁が7・5尺と不



第13図
柱立柱建物実測図(5) (1/100)

等かつ不対称である。桁は東から5・5・3・4尺と不等間隔である。柱穴は径30cm前後の円形をなし、深さは20~30cmのものが多い。柱穴埋土からは土師器細片とともに比較的大きな白磁片が出土した。妻柱が東西でずれているのが問題に残るが、一応建物としてまとめた。

S B11(第13図) 西区中央部で検出した1×1間の小建物である。東西240cm(8尺)、南北270cm(9尺)を計る。柱穴は径21~36cmの円形をなし、深さは19~25cmである。柱穴埋土からは土師器の小片が出土した。S B12・S B13と重複するが、柱穴の切り合いがなく先後関係は不明。

S B12(第13図) S B11の東側で重複して検出した。1×1間の小建物で、東西240cm(8尺)、南北270cm(9尺)を計る。柱穴は西側の2穴が径25, 38cmの不整円形、東側は径20cmの円形を呈し、21~35cmの深さをもつ。柱穴埋土からは土師器の細片のみが出土した。この建物とS B11は同規模であり、また位置関係からいっても、新・旧は明らかにしがたいにしろ建替による重複と考えられる。

S B13(第13図) S B11・S B12と東側を重複する側柱だけの東西棟である。2×3間の平面規模をもち、実長は梁行300cm、桁行450cmを計る。柱間は桁が東から120cm(4尺)・150cm(5尺)・180cm(6尺)といった不等な寸法をとる。梁は東西不対称で、東側が北から165cm

田村第2地点掘立柱建物計測表(身寄のみ)

規 模	方 向	桁 行		梁 行		方 位 (磁針)	床面積 (m ²)	備 考
		実 長	柱間寸法(尺)	実 長	柱間寸法(尺)			
SB01	3×2	N S	720(6)	8	420(6)	7	N7°30'W	30.24
SB02	3×2	N S	570(6)	6・7・6	390(3)	6.5・6.5	N3°30'W	22.23
SB03	3×2	N S	690(3)	8・7・8	390(3)	6.5・6.5	N2°W	26.91
SB04	3×2	N S	690(3)	8・7・8	390(3)	7・6	N5°30'W	26.91
SB05	3×2	N S	630(2)	7	390(3)	7・6	N3°30'W	24.57
SB06	2以上×2	E W	390+α	6.5・6.5	390(3)	7・6	N9°W	
SB07	3×2	N S	630(2)	6・7・8	300(6)	5・6	N6°W	18.90
SB08	2×2	N S	360(2)	7・5	360(2)	6	N9°W	12.96
SB09	2×2	N S	390(3)	7・6	390(3)	8・5	N4°W	15.21
SB10	4×2	E W	510(7)	4・3・5・5	360(2)	7・5	N9°30'E	18.36
SB11	1×1	N S	270(9)	9	240(8)	8	N4°W	6.48
SB12	1×1	N S	270(9)	9	240(8)	8	N6°W	6.48
SB13	3×2	E W	450(8)	6・5・4	300(6)	4.5・5.5	N	13.50
SB14	1×1		360(2)	12	360(2)	12	N7°30'E	12.96
SB15	2×1	N S	330(1)	8・3	270(9)	9	N1°W	8.91

桁・梁 実長はcm ()内は1尺を30cmとして割った数値

(5.5尺)・135cm(4.5尺)、西側が135cm(4.5尺)・165cm(5.5尺)の不等間隔をとる。柱穴は円形で、径18~28cm、深さ20~30cmである。柱穴埋土からは上師器と須恵器の細片が各々1点ずつ出土した。南側桁の柱穴を1つ欠き、東西妻柱がずれるが、一応建物としてまとめた。

S B14 (第14図) S B01の西北側で検出した1×1間の建物である。東西・南北とも360cm(12尺)の規模をもつ。柱穴は円形をなし径20~30cm、深さ13~40cmを計る。柱穴埋土からは上師器の細片が出土した。

S B15 (第15図) 西区の北側で検出した1×2間の側柱だけの建物である。南北棟で、実長は東西270cm(9尺)、南北は330cm(11尺)を計る。南北の柱間寸法は北から8・3尺の不等間隔である。柱穴は円形で径20~35cm、深さは20cm前後である。出土遺物はない。

(3) 穫穴住居跡 (第14図、図版12~14)

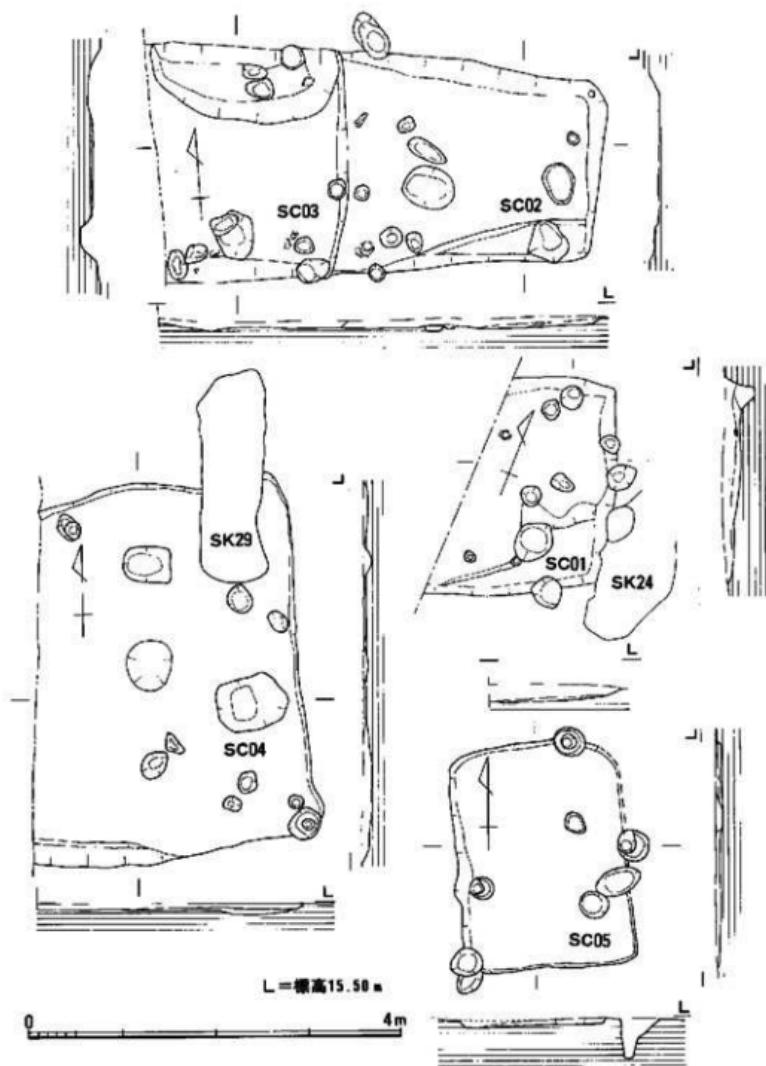
発掘区の西区から5軒分検出した。そのすべてが発掘区西側境に沿って北から南に並び、竪穴住居跡の主体がさらに西にあることを窺わせる。またいずれの住居跡も、土塙基、溝、掘立柱建物と重複または切り合い関係をみせており、この地が繰り返し生活、生産、埋葬の場所として利用されたことがわかる。

S C01 (第14図) 西区で検出した。今回確認した竪穴住居跡のなかで一番北に位置する。西側は発掘区外にかかり、また東側はS K23土塙とS K24土塙基から切られている。北より西へ18°ふれた方形もしくは長方形の小型の竪穴住居跡で、南北長2.6m、東西残存長2.0mを計る。東南隅は床面からわずかに高い平坦面をなす。床面までの深さは0.2mを計る。住居跡内にピットをいくつか検出したが、柱穴かどうかは明確にできなかった。覆土からは上師器・青磁・白磁・施釉陶器などの破片とともに10点余の鉄滓が出土した。

S C02 (第14図) S C01の南3.5mで検出した。S C03から西側で切られる。ほぼ北に方位をとった竪穴住居跡で、南北長2.0~2.4mを計り東側が狭くなる。東西残存長は2.8mで、ほぼ長方形のアランをなすものと考えられる。残存する床面までの深さは15cm。東南隅には床面より5cm高い平坦面をもつ。床面のほぼ中央にある比較的大きなピット2つと東側中央のピットはこの住居跡に伴うものと思われる。床面からは土師器・青磁・白磁とともに20点以上の鉄滓が出土した。

S C03 (第14図) S C02を東側で切り、西側は発掘区外に延びる。南北長2.6m、東西残存長2.1mとS C02に比べやや大きいが、方位および床面標高はほぼ同じで、S C02を西にスライドさせた感が強い。北壁に沿って長さ1.9m、幅0.8m、床面からの深さ5cmの浅い長方形土塙が付属している。柱穴は明確にしえなかった。覆土からは土師器・須恵器・白磁などの破片が出土した。

S C04 (第14図) S C02・S C03の南4.5mの所で検出した竪穴住居跡である。上面はかな



第14図 墓穴住居跡実測図 (1/60)

り削平を受けており、残存状態は極めて不良で、状が全然認められない部分もある。西側は発掘区外にかかり、また東北隅部分は S C 29 土塙墓によって切られている。方位をほぼ北にとった、南北長 4.1m、東西残存長 2.65m の南北に延びた長方形プランをなす。床面までの深さは、最高でも 7cm 前後である。床面中央部には径 50cm ほどの浅い小窓穴がみられ、炭化物が充満していたところから炉のものではないかと推定される。この小窓穴を除んだ南北両側 1m の所に径 30~50cm、床面からの深さ 11~13cm の不整円形のビットが各々あり、この遺構に伴う。床面に密着して糸切り底の上師器皿が 2 点出土した。他にも土師器・青磁の破片がある。

S C 05 (第 14 図) S C 04 の南 6.5m で検出した 2.5 × 1.75m の東西に長い小型長方形窓穴住居跡である。残存状況は極めて悪く、床面までの深さはよくて 5cm、東壁に至ってはわずかに床面線を確認できるのみである。床面からの出土遺物は青磁細片 1 点の他はすべて土師器で、比較的残りの良い糸切り底の皿などがある。S D 29 が埋没したのち作られた住居跡である。

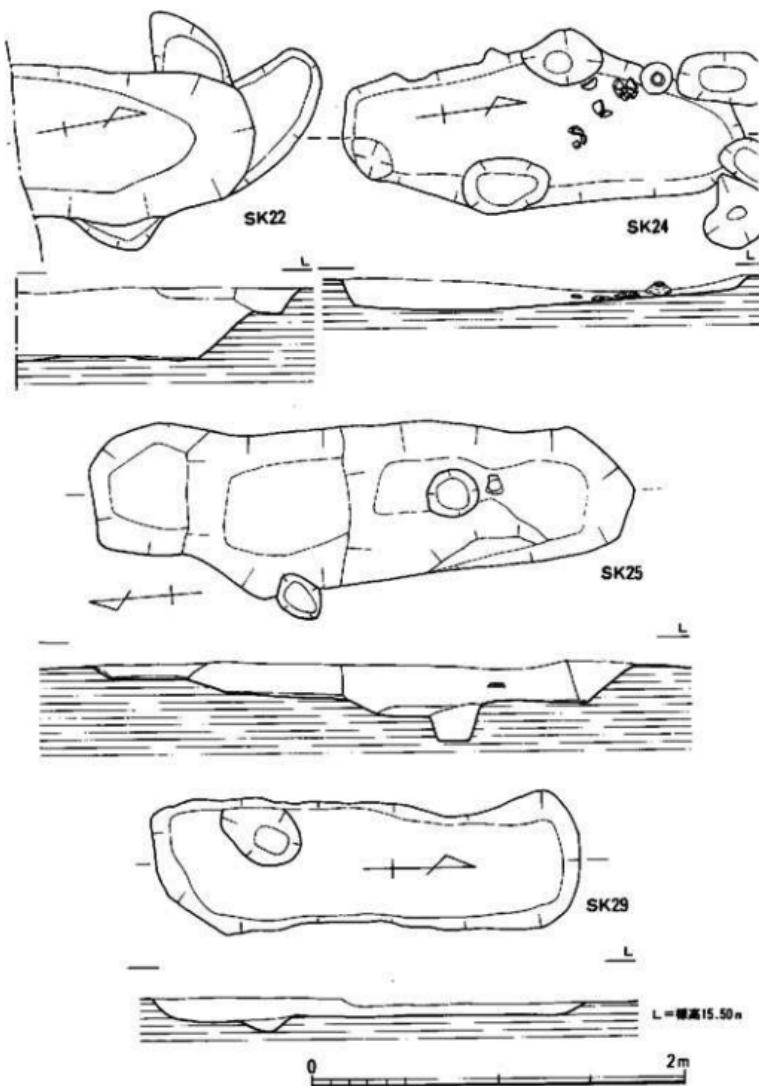
(4) 土塙墓 (第 15・16 図、図版 14~16)

土塙墓は西区と南区であわせて 6 基検出した。そのほとんどが発掘区の西端近くに位置する。西区では住居と重複し、特に窓穴住居とは切り合い関係をもつ（土塙墓が新しい）。残存状況は極めて悪く、S K 22・S K 25以外の土塙墓は、墓壇上面から墓底までの深さが 5~15cm しかない。主軸方位は南北と東西の 2 つに分かれ、前者が 4 基、後者が 2 基を数える。この 6 基の他に、削平されたり、別遺構との切り合いによって不明確であるが、たぶん土塙墓であろうという遺構として S K 23・S K 30・S K 33・S K 34 などがあげられる。ここでは明確な 6 基についてだけ述べる。

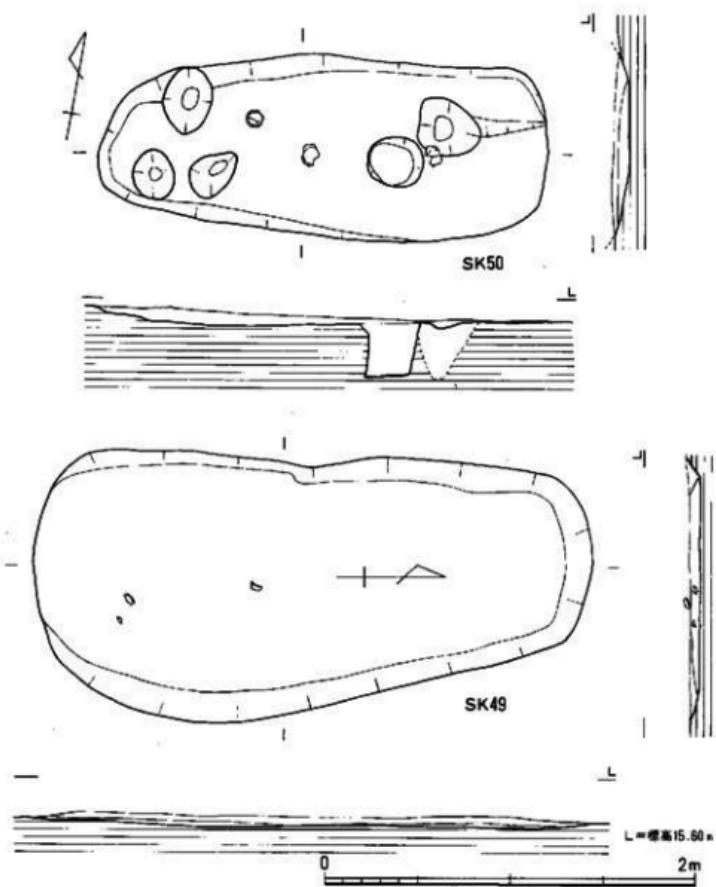
S K 22 (第 15 図) 西区の S C 01 の北側で検出した。今回調査した土塙墓中最も北に位置する。西側は発掘区外にかかり、東側は浅いビットに切られる。幅 0.75m、残存長 1.3m、深さ 38cm のやや隅丸の長方形をなす。主軸方位は N - 80° - W をとる。埋上からは上師器・青磁が出土しているが、いずれも細片で副葬品とは認めがたい。

S K 24 (第 15 図) S K 22 の東南 1.2m の所で検出した主軸方位を N - 6° - W にとる土塙墓である。長さ 2.15m、最大幅 0.85m の中央部が膨らむ隅丸長方形のプランをなす。深さは 15cm しかなく、残存状況は良好といよいがたい。しかし幸いなことに北側の墓床に、完形もしくはそれに近い土師器碗 1 、皿 3 を検出した。副葬品と考えられる。本墓と S K 22 の間には S K 23 があり、また西側には S C 01 があるが、いずれも本墓が切っている。

S K 25 (第 15 図) S K 24 のすぐ南で検出した土塙墓である。主軸方位を N - 4° - E にとった隅丸長方形を呈し、長さ 2.8m、幅 0.85m、深さ 8~18cm を計る。墓壇底は南側から階段状に下がってゆく。墓壇北側の中央部から、床面より 5cm 浮いた状態で青磁碗片が出土した。他に僅 5~7cm の鉄津、上師器・青磁などの破片が埋土中より出土している。



第15図 土墳墓実測図(I) (1/30)



第15図 土壌墓実測図(2) (1 / 30)

S K 29 (第15図) 西区中央部の西側で検出した。南側半分は S C 04を切って設けられている。主軸方位を N - 1° - W とほぼ真北にとった隅丸長方形の土壌墓である。長さ2.25m、幅0.65mで、墓底までの深さは10cm前後と残りが悪い。土師器・青磁の細片と鐵滓が埋土中より出土した。

S K 49 (第16図) 南区の北側で検出した土壌墓である。上面の削平が著しく、ほとんど毫

底部分しか残していない。ほぼ真北のN-1°-Eに主軸方位をもった長さ3.0m、幅1.5mの隅丸長方形の平面を呈する。深さは5cm前後しかない。床面のほぼ直上で土師器皿・白磁などとの破片が出土した。

S K50（第16図） S K49の西北2mの所で検出した。著しい削平を受けており、墓底部分がわずかに残るだけの上壙墓である。N-80°-Wの主軸方位をとった長さ2.4m、幅1.0mの隅丸長方形をなす。深さは5~6cmしかない。床面に密着して完形およびそれに近い土師器皿3点を検出した。副葬品であろうか。本墓はS B10と重複するが、柱穴との切り合いはなく先後関係は不明である。

（5） 土壙（第17・18図、付図、図版16・17）

第2地点で上壙・土壤墓としてSKの番号を打ったものは07~58の合計52におよぶ。そのうち土壤墓以外の土壤についてここで取り扱うが、それらは検出場所によって大まかに次の三つに分けることができる。①東区のSD09を中心とした付近に位置するもの。②SD09の西南部にあたる付近に位置し、住居区と重複しないもの。③西区・南区の中にあって住居区と重複するもの。①はSK07~SK15、②はSK16~SK21、③は残りすべてから土壤墓を除いたものが相当する。

S K07（第17図） 西区中央部で検出した。SD09の北岸を南側で切る。1.4×1.15mの梢円形の平面をもつ土壤で、深さは70cmを計る。壇内覆土はほとんど砂である。覆土からは上師器・須恵器・青磁の破片が出土した。

S K08 SK07からSD09をはさんだ約3.5m南で検出した。1辺ほぼ2mの正方形土壤で深さは13cmを計る。底面の凹凸が激しい。SD12を切っている。土師器の細片が出土した。

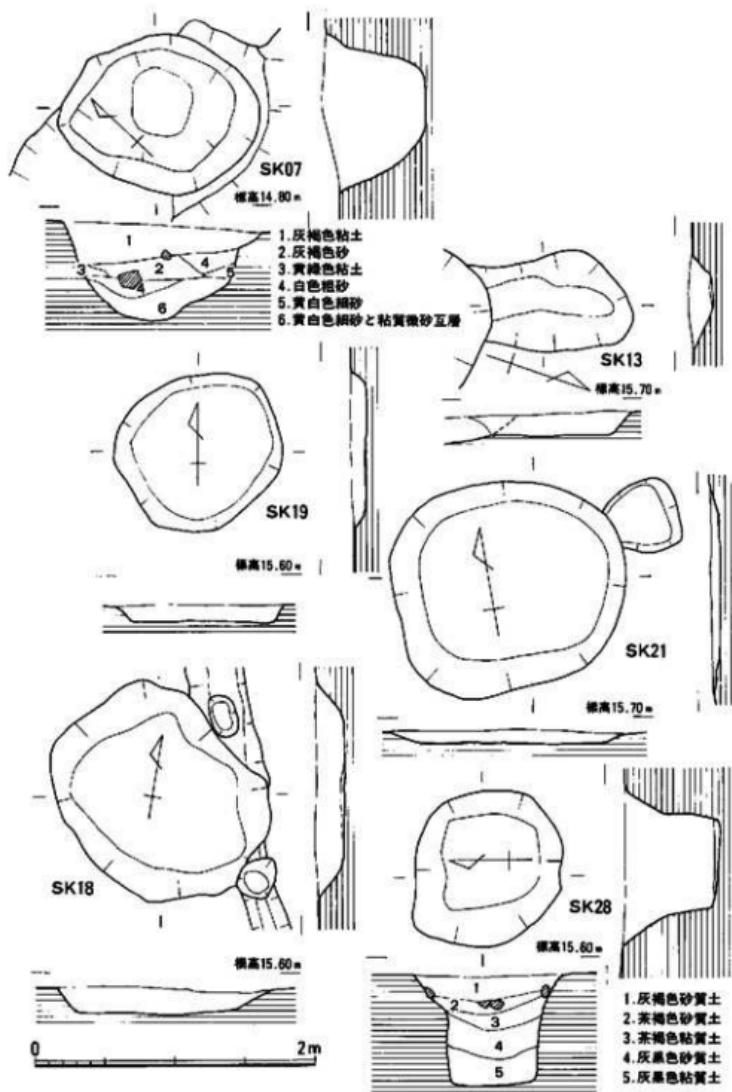
S K09 SD09の北側で検出した長径1.5m、短径1.1mの梢円形土壤である。南半分が段落ちにかかり、深さは10~24cmを計る。古墳時代の土師器・須恵器片だけが出土している。

S K10 SK09のすぐ東で検出した不整長方形の土壤である。長さ1m、幅0.4m、深さ20cmを計る。古墳時代の土師器片だけが覆土中より出土した。

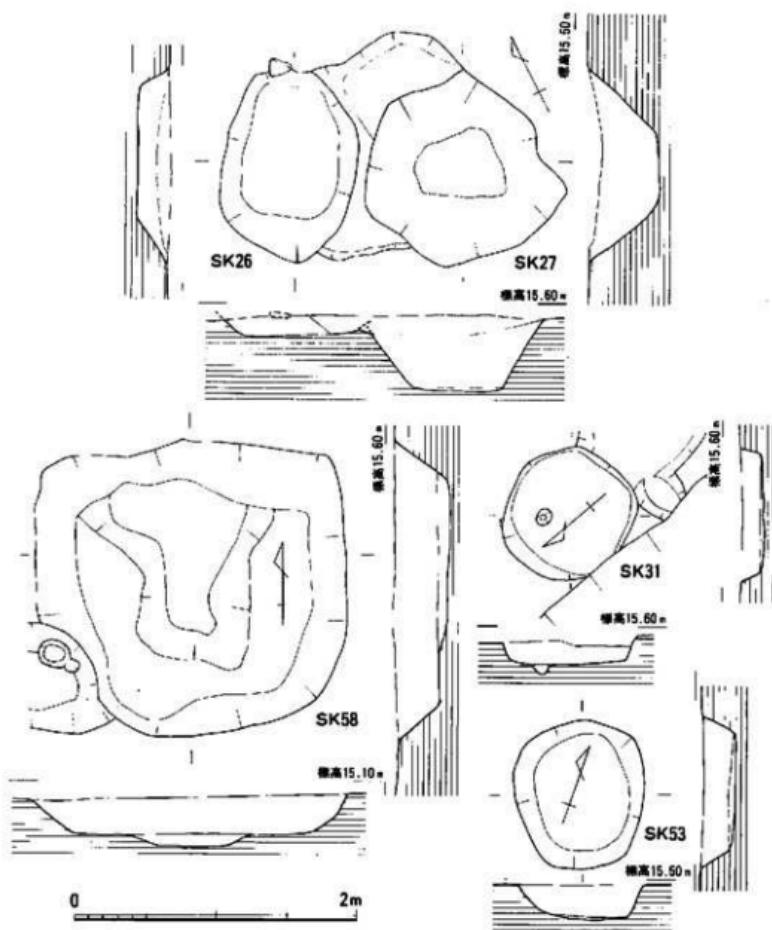
S K11 西区のはば中央、SD09の北側で検出した土壤である。SD13を切って作られているが、残りは悪い。長径2m、短径1.8mの梢円形を呈し、深さは5~6cmと浅い。覆土からは縄文土器・上師器・須恵器の破片が出土した。

S K12 SK11の東4mの所で検出した。径1.6mの円形の土壤で、床面北側にはさらに径0.7mの円形ピットを設けている。削平され、深さは10cmにすぎない。SD13を切っている。覆土からは縄文土器・古墳時代の上師器の破片が出土した。

S K13（第17図） 西区の最東端で検出した。SD09に付随するSX7に切られた隅丸長方形の上壙で、残存長1m、幅0.65m、深さ15cmを計る。出土遺物はない。



第17回 土堆実測図(I) (1 / 40)



第18図 土壙実測図(2) (1/40)

SK14. SD11の西側北岸で検出した。長さ1.8m、幅0.7m、深さ15cmの隅丸長方形を呈する。段落ち下に作られており、SD11と関係した土壙ではないかと考えられる。出土遺物は繩文土器1片のみである。

S K15 S K14のすぐ西南で検出した。長径1.0m、短径0.9mの楕円形の土壙で、深さは38cmを計る。S K14と同様の性格をもつものか。覆土の砂質土中から土師器細片が出土した。

S K16 S D09の北側で検出した。S K09の西南2mの所にあたる。段落ちに南北分を削られているが、長さ1.5m、幅0.5m、深さ20cmのほぼ長方形を呈する。覆土から土師器細片が出土した。

S K17 S D09・S D11に伴う段落ちの南側で検出した。長径1.5m、短径0.9mのやや不整な楕円形をなし、深さは3cmを計る。S D22によって北側を切られる。覆土からは縄文土器、上師器の破片が出土した。

S K18 (第17図) S K19のすぐ南で検出した不整長方形の土壙である。長さ1.6m、幅1.3m、深さ20cmを計る。S D23を北側で切る。覆土からは土師器・須恵器・青磁・白磁・施釉陶器の細片が出土した。

S K19 (第17図) S K18の南7mの所で検出した土壙である。径1.2mのほぼ円形をなし、深さは10cmである。覆土からは鉄滓が2点出土した。

S K20 S K19の西で検出した長径1m、短径0.6m、深さ9cmの小土壙である。覆土から土師器・青磁の細片が出土した。

S K21 (第17図) S K20の西1.4mの所で検出した。径約1.6mのほぼ円形をなし、深さは10cmを計る。覆土の暗青灰色砂質土から土師器・青磁の破片とともに鉄滓が出土した。

S K23 S K22・S K24土壙墓とS C01にはさまれるようにして検出した。切り合いが激しく、規模等については明確にできなかったが、およそ隅丸長方形をなすものと考えられる。覆土からは土師器・白磁・施釉陶器が出土した。S C01に切られている。土壙墓の可能性もある。

S K26 (第18図) S K23の東北2mの所で検出した長径1.35m、短径0.95m、深さ2.5cmの楕円形土壙である。出土遺物はない。

S K27 (第18図) S K28の東隣で検出した。径1.3mの不整な円形七墳で、深さは55cmと検出した土壙のなかでは深い。覆土からは多量の七師器片とともに、青磁・白磁・須恵器の破片、および滑石製品片と鉄滓が出土した。

S K28 (第17図) 西区中央のやや北寄りで検出した。上面は1×1.5mの近正方形をなし、底面は0.7mのほぼ正方形をなす。深さは80cmを計り、覆土は砂質土と粘質土の五層をなしていた。まとまった七師器と1~2点の青磁・白磁の細片および滑石製石鍋片が出土した。壇内に施設する遺構はみられなかったが、その形態からして素掘りの井戸とも考えられる。S B01と重複するが、先後関係は不明。

S K30 西区中央部の西端で確認した。西側が発掘区外にかかるが、東西に方位をとった長方形土壙と推定される。幅0.7m、深さは10cmに満たない。覆土からは土師器・青磁・白磁の細

片が少量出土した。

S K31(第18図) 西区の西端で検出した。径0.9mの円形土壙で、深さは16cmを計る。覆土からは少量の土師器片が出土した。S D29を切り、またS B07と重複するが先後関係は不明。

S K32 S K31の南7mの所で検出した。遺構の多くが発掘区外にかかり、全容は不明である。覆土からは土師器の細片が出土した。

S K33 南区の南側で検出した。東側が発掘区外にかかるが、やや不整の長方形土壙であろう。残存長1.2m、幅0.8m、深さ30cmを計る。覆土からは土師器の細片が出土した。

S K34 S K33のすぐ西で検出した。長さ1.3m、幅0.8mの長方形土壙であるが、削平された壁をほとんど残さない。土師器と白磁の細片が少量覆土より出土した。

S K35 S K33のすぐ北で検出した幅1.2mほどの不整形土壙である。深さは30cmで、覆土からは完形に近い土師器皿が5点出土した他、その細片や白磁片などが出土した。

S K36 S K35の北隣りで検出した楕円形土壙である。長径1.2m、幅0.8m、深さ5cmを計る。土師器・白磁の細片が覆土から出土した。

S K37 S K36の西北で検出した楕円形土壙である。長径0.95m、短径0.6m、深さ4cmを計る。覆土からは土師器・須恵器・青磁の細片が出土した。

S K38 S K37の東北4mで検出した。東側が発掘区外にかかる。幅2mの長方形土壙と考えられる。削平が著しく、深さはほとんどない。覆土からは土師器・白磁の破片が出土した。

S K39 S K38の北3.5mで検出した。長さ0.6m、幅0.4mの隅丸長方形をなす小土壙である。深さは3cmほどしか残らず、覆土からは土師器細片が3点出土しただけである。

S K40 S K39の北4.5mで検出した長方形の小土壙である。長さ0.5m、幅0.4m、深さ4cmを計る。覆土より土師器・青磁の細片が出土した。

S K41 南区のはば中央で検出した長方形の土壙である。長さ1.6m、幅0.6mで深さは7cmと浅い。土師器細片と鉢底が覆土から出土した。S K49に切られている。

S K42 S K41の西北で検出した土壙で、不整形である。東西1.3m、南北1.2m、深さ5cmの残りの悪い遺構で、覆土からは土師器細片・白磁底などが出上した。

S K43 S K42の西側で検出した。西半分は削平によって残存しないが、幅1.3mの方形に近い土壙と考えられる。深さは3~4cmでかろうじて検出した。覆土からは土師器の細片が出土した。

S K44 S K42の北1mの所で検出した土壙である。東西方位の長方形をなし、長さ1.5m、幅1.1m、深さ10cmを計る。覆土から土師器・須恵器片が出土した。

S K45 南区中央西端で検出した。幅1.1mの方形の平面をなすが、内側は発掘区外にかかる。深さは7cmで、覆土からは土師器細片が少量出土した。

S K46 S K40のすぐ北で検出した長さ0.6m、幅0.5mの近正方形土壙である。深さ10cmで、

覆土からは白磁底部、土師器・青磁などの破片が出土した。

S K47 S K46の北で検出した。長さ0.7m、幅0.5mの不整長方形をなし、深さは7cmを計る。土師器の細片が覆土から少量出土した。

S K48 S K47の北に隣接して検出した。長さ1.3m、幅0.5~0.8mの不整形土壙で、深さは4cmと浅い。土師器・須恵器・白磁の細片が少量出土した。

S K51 南区北側で検出した。S K50のすぐ南にあたる。長さ1.5m、幅0.8mの長方形土壙で、壇内南側には0.7mの円形の窪みがある。ほとんど床面だけを残す土壙で、土師器・白磁片と滑石製品片が出土した。

S K52 S K51の西北1.5mで検出した。長さ1.0m、幅0.7mの長方形土壙で、深さは25cmを計る。覆土からはまとまった土師器片・白磁細片および滑石製品片が出土した。S B10と重複するが柱穴との切り合いはなく、先後関係は不明。

S K53 (第18図) 南区北側で検出した長径1.05m、幅0.9m、深さ25cmの楕円形土壙である。覆土からは土師器片と白磁細片が出土した。

S K54 南区北端で検出した土壙である。径1mの不整円形をなし、深さは18cmを計る。覆土からは土師器・須恵器破片と鉄滓が出土した。

S K55 南区中央で検出した長径0.8m、短径0.5mの楕円形土壙である。深さは10cmで土師器の細片と滑石製品片が少量出土した。

S K56 南区の北端で検出した。この土壙とS K57・S K58は弥生時代河川の北岸の位置にあたり、遺構の切り合いが複雑であった。長径1.0m、短径0.8mの楕円形で、深さは35cmを計る。覆土からは土師器・青磁などの破片が出土した。

S K57 S K56の北側で検出した長さ1.8m、幅0.6m、深さ20cmの長方形土壙である。主軸方向は南北にとる。覆土からは白磁底部と土師器細片が出土した。

S K58 (第18図) S K57の東隣で検出した。1辺2.1mの方形土壙で、深さ40cmを計る。底面には長さ1.3m、幅0.8~1.4m、深さ10cmの落ち込み部分がある。底面からわずかに浮いた状態で、高台付椀、皿などの土師器が出土した他、青磁碗片・白磁片・滑石製品なども覆土から出土した。

(6) 溝 (第19図、付図、図版17~19)

第2地点で検出した溝(S D)状遺構はS D09~30の21条である。それらは大きく、①発掘区東区のS D09を中心とした溝群と②西区の台地上を走る溝群に分けられる。

①の中心となるS D09は、幅2.3m、深さ0.6mの規模をもち、西から東へと延びている。西端はS X04、S X06と接続するが、後には流路の変更があったらしく、南のS X06からS D11のラインにとってかわられる。中央部ではS D10が南から接続する。その途中でS D12が東南

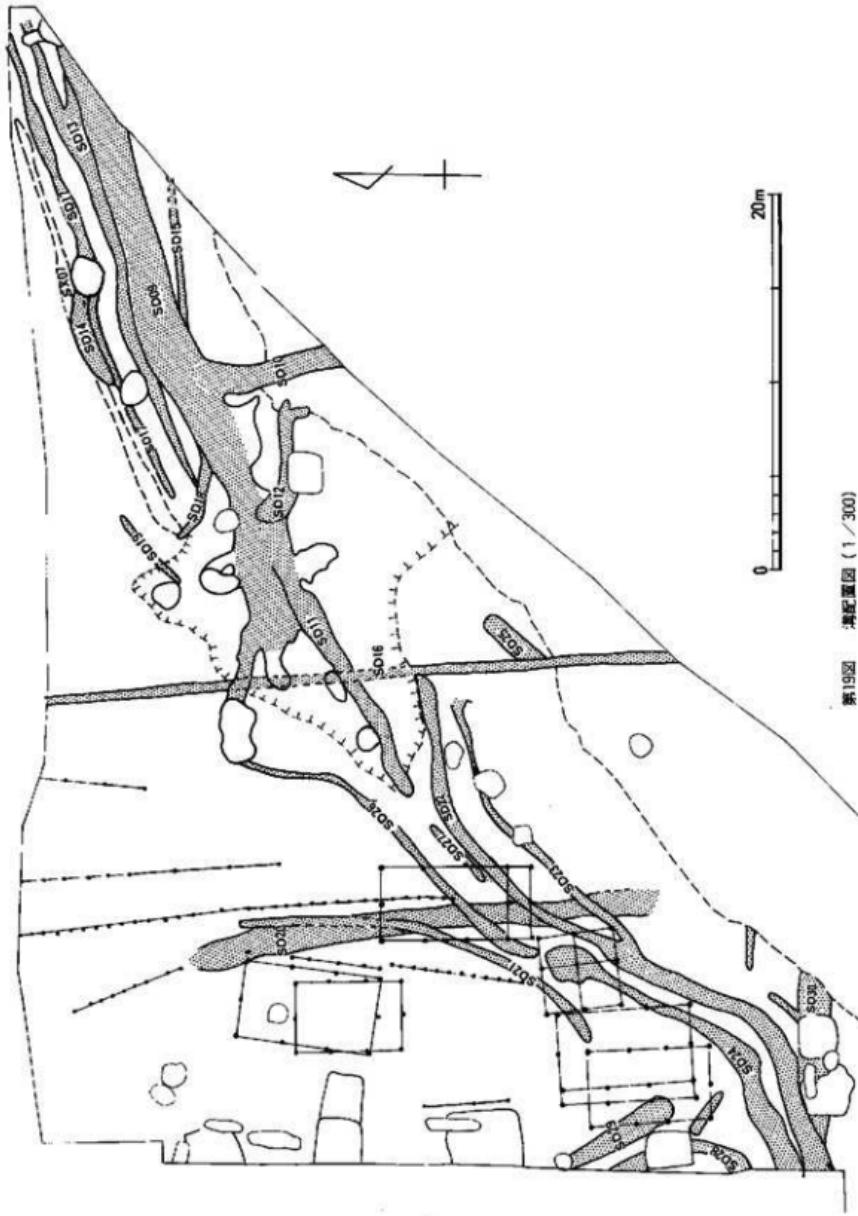
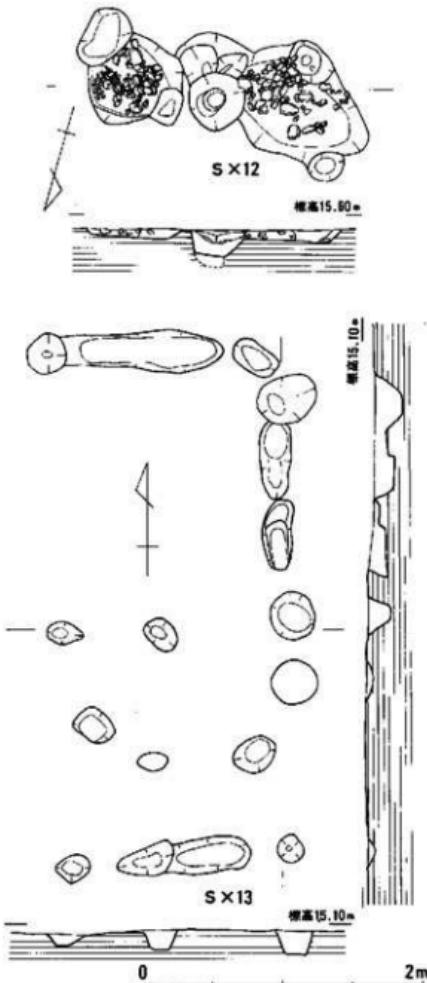


圖19-5 溝配置圖 (1 / 300)

より S D09に入り込むが、切り合い関係では S D12が新しい。S D09の両岸には S X 03、S X 05の様な円形の水溜り状遺構が設けられている。また S D09の北岸上には S D13、S D14のような極めて浅い溝状遺構がみられる。溝内には足跡状の凹みが多数あり、あるいは S X 07のような足跡状の列からなる遺構とともに、狭い“道”をなしたものかもしれない。南北に直線的に延びる S D16は S D09が埋没した後設けられたものである。

②の西区の溝は多くが西から東北に延びるもので、その幅は0.5~2.0m、深さも50cmに満たない。これらの溝のうち S D09近くまで延びるのは S D22、S D23、S D26であるが、いずれも浅くなったり、細くなったりしており、S D09と接続するものかは明らかにしがたい。西区が中世の居住区であることを考えれば、壠的なものを考えてよく、S D21があるいはそれに当るかもしれない。しかし樹との関係もあり断言はしない。S D20は幅1.5m、深さ10cmほどのかなり削平を受けた溝であるが、他の溝と異なり南北に走り、また交差する溝すべてに切られている。S D28、S D29のような短かいもの、円形をなすものもある。S D30は S K57、S K58に切られ、弥生時代河川の脇の所で途切れしており、この河川に伴うものかとも考えられる。



第20図 S X 12 S X 13 施測図 (1/40)

その他の遺構 (S X) としたもの多くが S D09に付設された水溜り状遺構であり、それに

についてはここでは述べない。図示した S×11、S×12はともに南区で検出したものである。S×11は幅0.8mの不整形土壌の中に径2~15cmほどの小石を置いている。S×12は径0.7mの不整円形の土壌中に、SK11同様小石を置いたもので、土壌の深さはいずれも5~10cmである。土師器の細片が石の間から出土した。

S×13は南区の南側で検出したもので、ピットと浅く短い溝をもって方形の区画を作った遺構である。西側は発掘区外にかかるが、南北幅は約3.9mを計る。ピットは径20~30cm、深さ20cm未溝で、東側に2問分、南北両側に1問分残る。そのピットの間に長さ0.5~1.0m、幅0.3m、深さ10cm程度の溝がある。ただ東側の南1問分にはそれが見当たらない。あるいは2×1+a間の擡立柱建物を構成するのかもしれないが、溝のあり方からして、ここではその他の遺構として取り扱かった。ピット・溝から土師器の細片などが出土した。

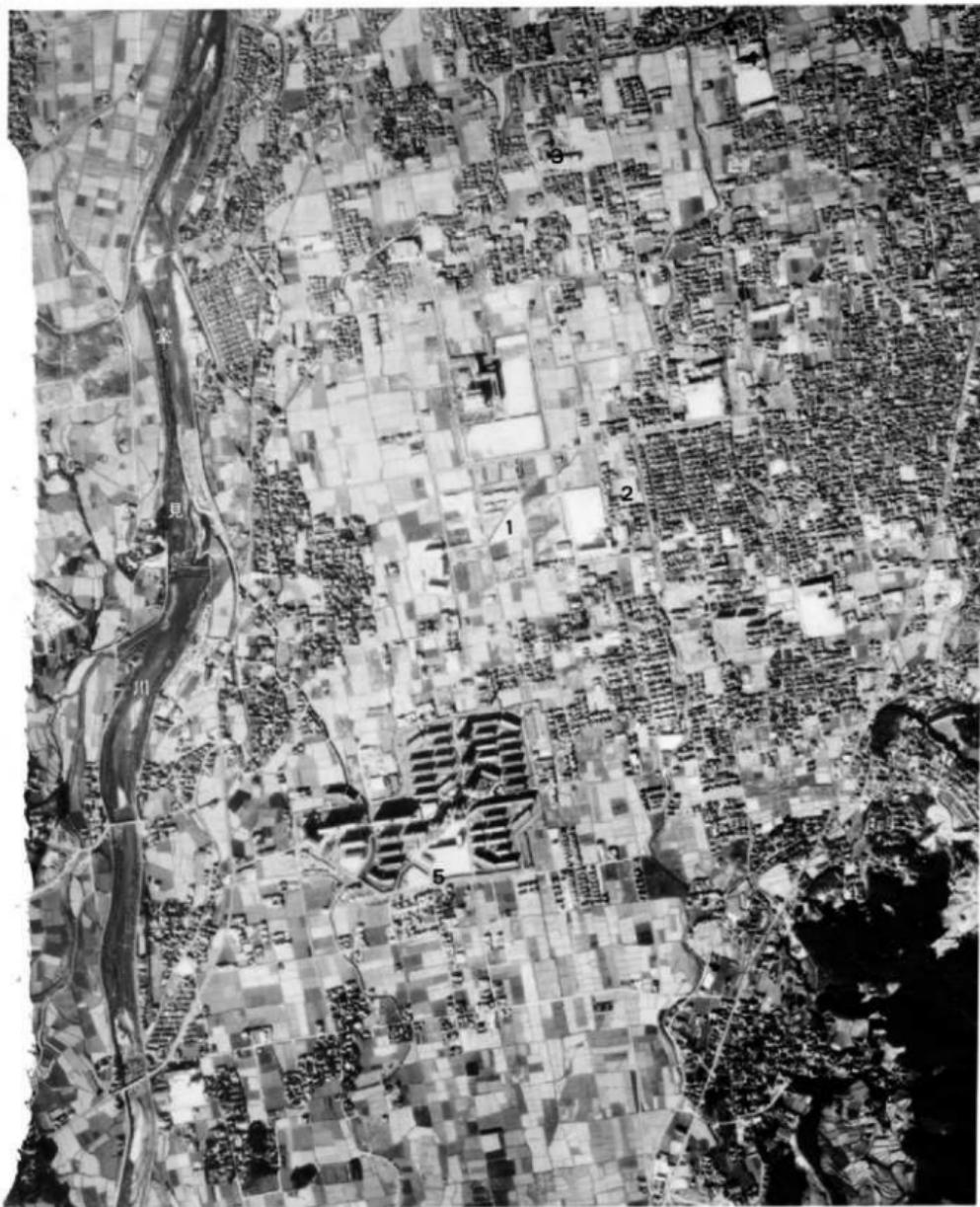
IV 小 結

田村遺跡の第1地点、第2地点の調査で検出した遺構は、Ⅲ章でみてきた中世の集落と今回は触れなかった弥生時代の水利施設に大きく分けられる。他に明確な遺構は見い出せなかつたが、縄文後期~晚期、古墳時代前期の遺物が出土しており、微高地を中心にして長い期間にわたり生活が営なされたことを示している。

本報告は時間的制約等から、第2地点の中世遺構を中心に述べただけの結果になつており、積み残した多くの問題点をかかえている。たとえば、第2地点の西区・南区で検出した中世集落は、遺構の切り合いや重複関係をもっており、单一時期の所産ではないことを表わしている。この解明のためには遺構出土遺物の検討が必要である。また第1地点および第2地点東区で検出した溝は、水田と関連した水利施設と想定され、1981年度調査を行なつてきた第3・4・5地点との関連が求められる。これらの問題点は、本報告では触れなかった他時期の遺構・遺物とあわせ、次報告『田村遺跡II』で検討する予定である。

図 版





1. 田村遺跡 2. 高柳遺跡 3. 次郎九高石遺跡 4. 鶴町遺跡 5. 四箇遺跡

田村遺跡周辺航空写真(昭和55年11月撮影。1/50000)



1



2

田村第1地点全景

1 南より

2 東より





1



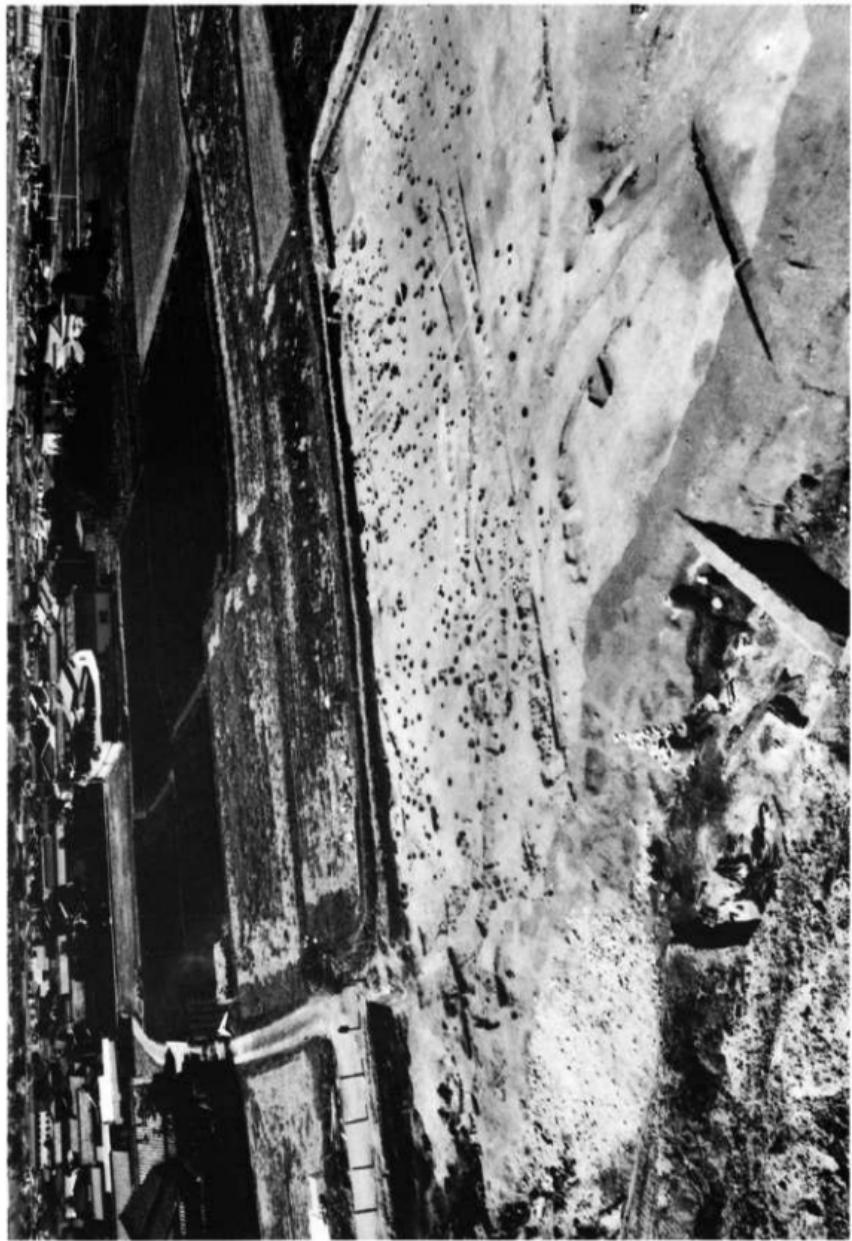
2

第1地点

1 溝・土壤

2 S X 1 杖列

田村第2地点全景





第2地点東区遠景

1 東より

2 東南より





第2地点東区近景

1 西より

2 東より





1



2

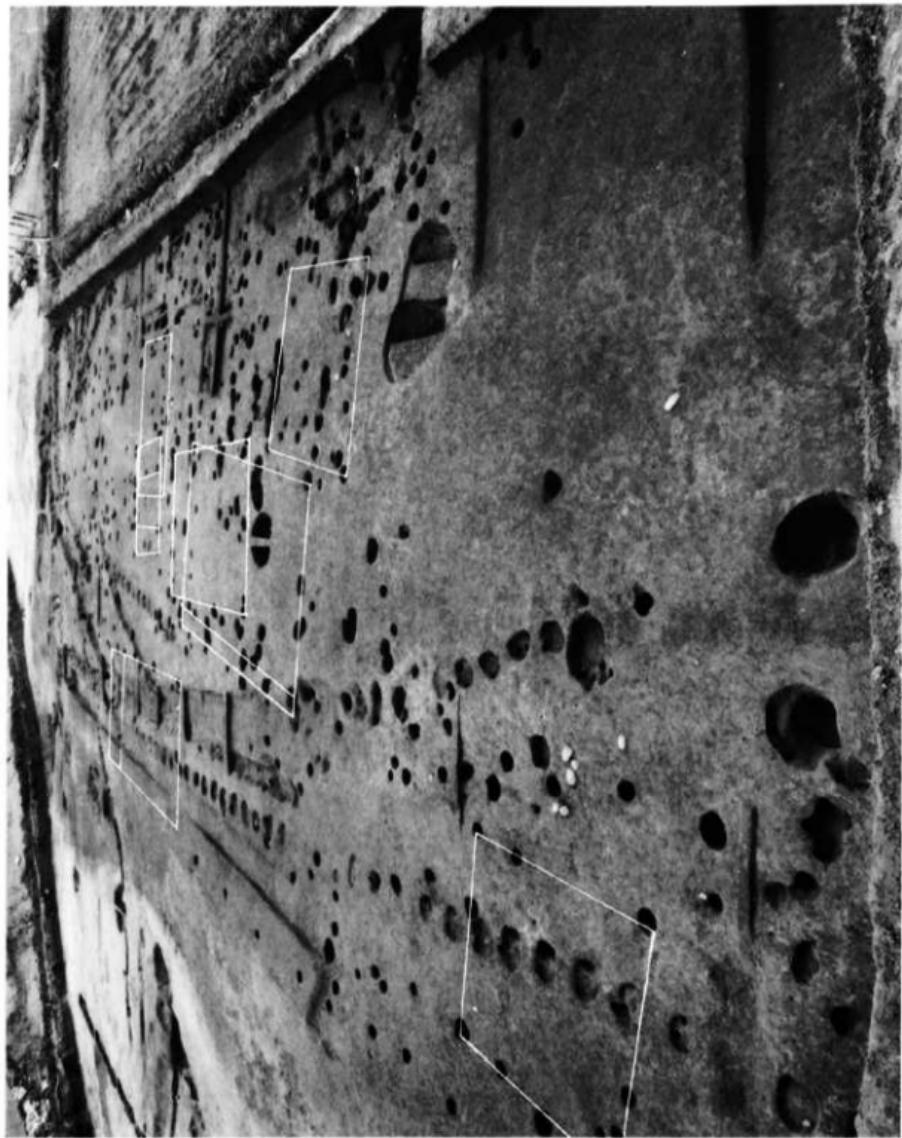
第2地点西区遠景 1 東南より 2 南より

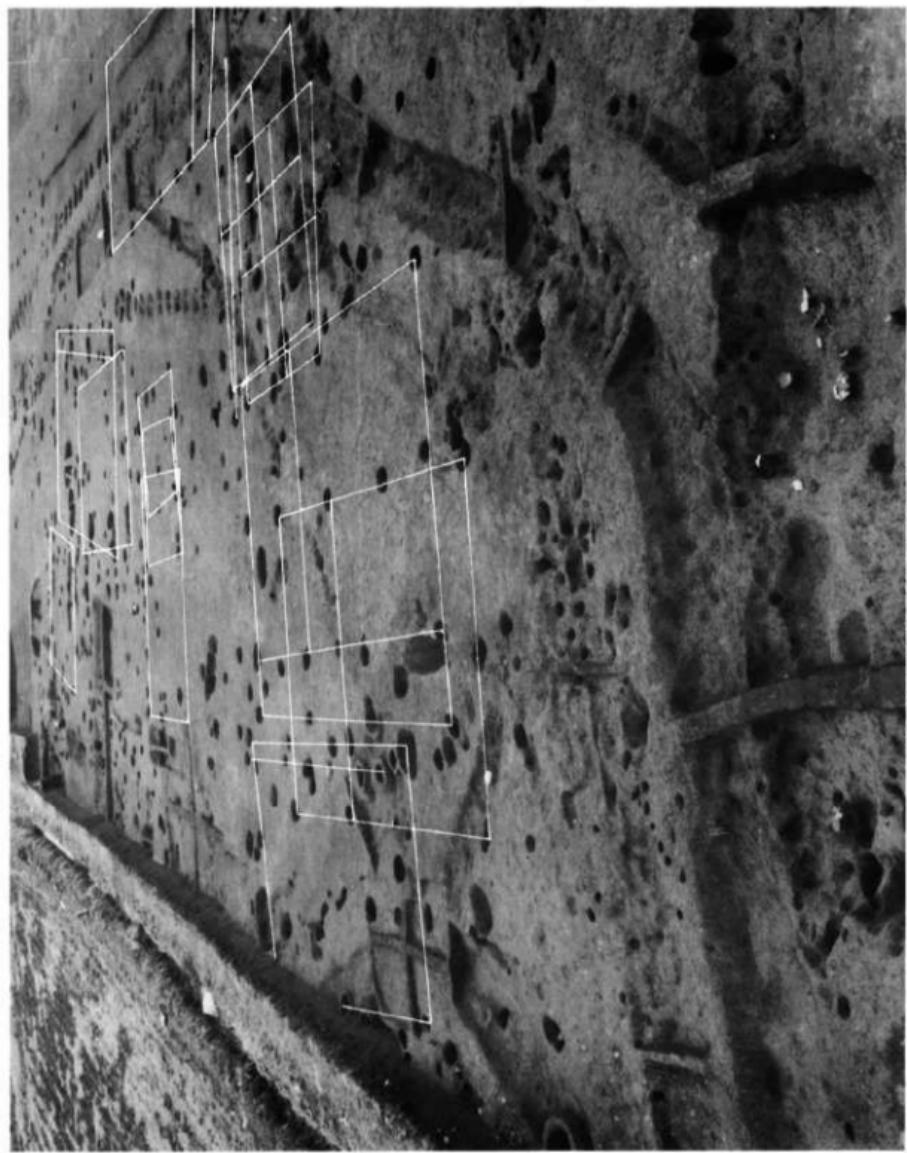


1 第2地点西区近景 2 SX 1~3 棚



第2地点西区遺構出土状況(北より)





第2地点西区遺構出土状況(面上り)



第2地点南区近景

1 北より

2 南より



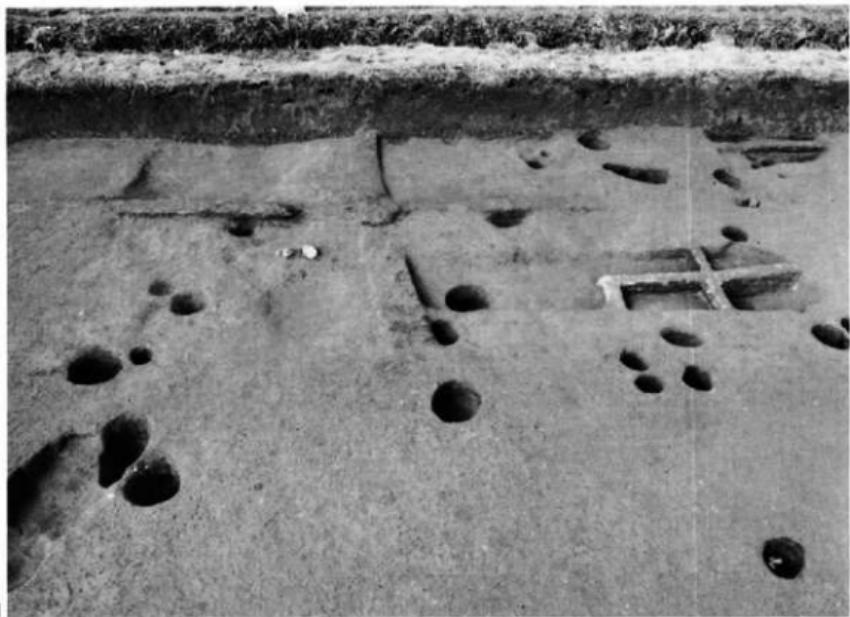
1



2

1 S C 02・03竪穴住居跡

2 S C 05竪穴住居跡



1



2

S C 04堅穴住居跡

1 東より

2 西より



S C01堅穴住居跡、S K22・23土壤墓

1 東より

2 北より



1



2

1 S K24土壙墓土器出土器出土状況

2 S K25土壙墓





1

2



1 SK49土壤堆

2 SK35土壤



1



2

1 SD09溝とSK07土壤 2 SK07土壤



1



2

1 SD09溝土層断面 2 SD09・SD10溝土層断面





1 SD09溝とSX04遺構

2 SX13柱穴列





1

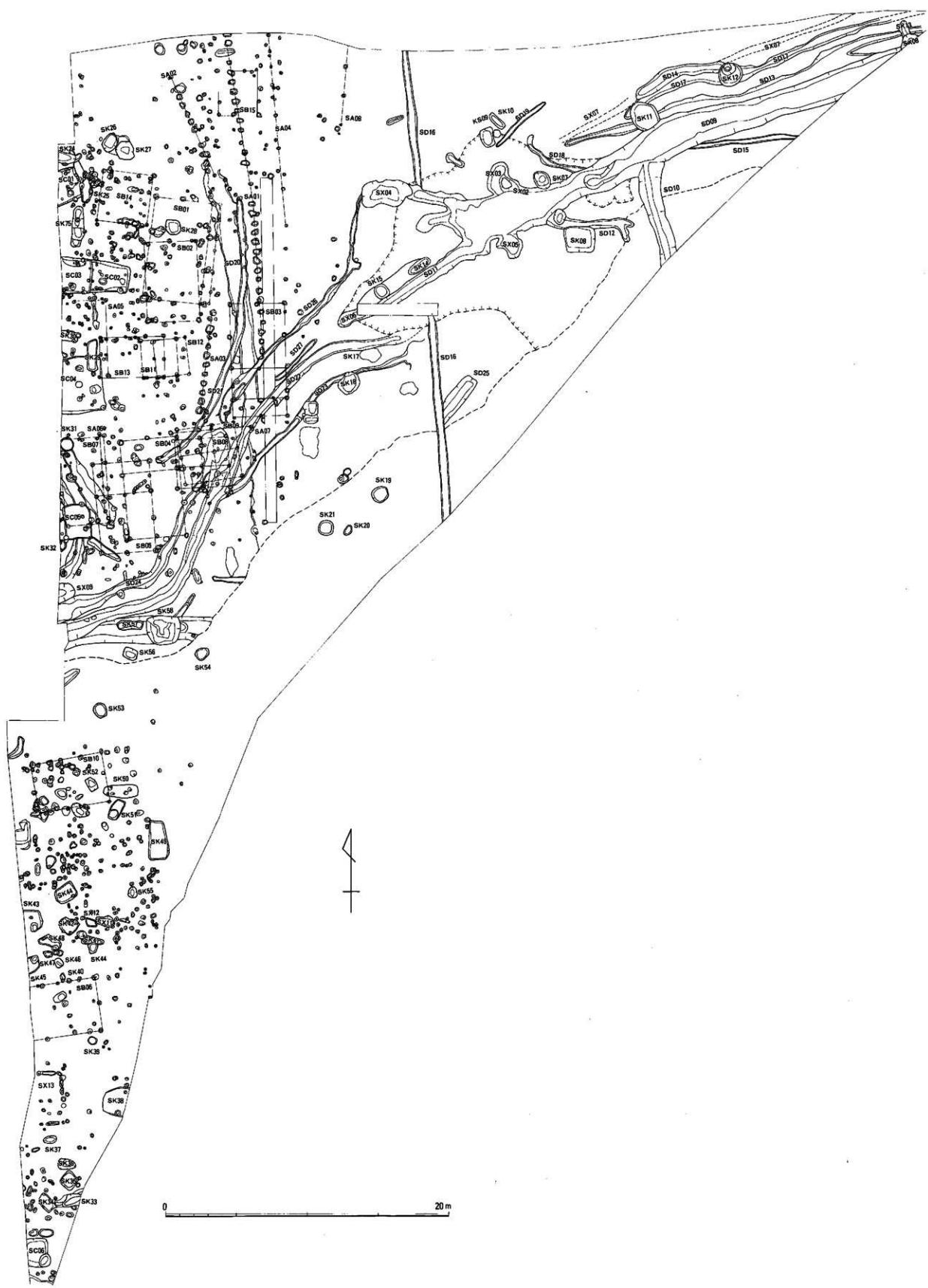


2

1 SX12集石遺構付近 2 SK12集石遺構

1
1

1
1



付図 第2地点全体図(1/200)

福岡市西区

田村遺跡 I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集

1982年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1 8 1

印刷 正光印刷株式会社
福岡市中央区赤坂1丁目2 21

田
村
遺
跡
I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集

1982

福岡市教育委員会